187

特250
275

内外危局と躍進国策の提唱

0003522000

0003522-000

特２５０－２７５

内外危局と躍進国策の提唱

国策研究会・編

国策研究会

昭和１１

ABA

137

特250
275

内外危局と躍進國策の提唱

寺250
275

內外危局と躍進國策の提唱

昭和一廿・帝國本部

推薦の辭

我國現下の非常時は之を我國民千載一遇の發展的大機と解するを最も至當なりとすべし。蓋し三百年鎖國の我國が西歐資本主義諸國の要望に開眼せられ、國際經濟の舞臺に躍現してより、國民固有の偉大なる發展力と調和力とが充實飽和の域に達し、玆に滿洲事變を契機として、遠く神祖肇國の大本に覺醒し、人類相通の大調和顯現を國民的使命として弘誓するに至れるが故なり。而も此の大機たるや、啻に一時の反動的現象に非ざるは勿論、又獨り我國民にのみ課せられたる國民的試練にも非ず、實に全人類の開悟すべき國際的大機なりと云ふを得べく、從つて我が國民的使命は則ち世界の嚮ふべき步趨を指示するの大道なりと云ふを得べし。

然るに今日我國は、人類未曾有の一大不通時に遭逢しつゝ思を玆に致さず、唯自分の非常時打開に懊惱沒頭するに急なる諸列强が、我國必至の展張に反して之を寬容するの遑あらざるは固より、我が國際行動の大義を却て猜視し之を抑遏するの方途に出でつゝあるに會す。是れ國民試練の重大意義を存する所以にして、當に一人と雖も自省興起せざるもの在る可らざるの秋なるを信ず。

本冊子は僅々百頁の小冊子に過ぎざるが、克く逼迫せる危機的情勢とその由て來る所を解明し、特に所謂自由主義機構の根本的禍因を剔抉しつゝ之が是正の方向、即ち我が國民的使命遂行の進路を闡示せる點に於て概ね剴切なるを認めたり。然も四圍の情勢に照し、我國の執るべき要策に關し多くを使唆しつゝ切々國民の重篤なる考索を促したるは、洵に同感を禁じ得ざる所なり。進んで江湖大方の御飜讀を切望すると共に、需めに應じて一言推薦の辭を寄せたる所以なり。

昭和十一年二月十日

陸軍省軍事調査部長
陸軍少將　山下奉文

目次

第一　逼迫する國際情勢

一、對立する非常時觀……（一）

二、日本を阻む四强……（四）

第二　非常情勢と日本の動向

一、國際非常情勢の步趨……（一三）

二、非常情勢の不可避性……（二七）

三、發展日本の必然的動向……（三一）

四、日本の新建設的方向……（三四）

五、新事態の創造的意義……（三八）

第三　創造的國策の基調

一、自由主義の弊瀆……（四一）

二、利潤觀の自家撞着……（四四）

三、歷史轉換の方向……（四八）

第四　强力國策の提唱

一、國策强化の必至……（五一）

二、强力國策の諸問題……（五七）

三、國策强化を斷行せよ……（六〇）

內外危局と躍進國策の提唱

第一　逼迫する國際情勢

一　對立する非常時觀

危機第二年を指標とする、皇紀二千五百九十六年を迎へ、國民の非常時意識に早くも弛緩懈怠の兆あるを否み難い。昭和十一年度豫算の成立が、高橋『健全財政』の勝利として一齊に謳歌せられたが如きは、その掩ふ可らざる一證左である。

危機第一年として指示せられ、緊張と戒心とを以て臨んだ二五九五年は、國民の半無意識的驀進裡に、皇國實勢の一大躍進を記錄してその曆日を終つた。

成程九十五年の日本の姿を顧みれば、人口一億は悠久無限なる國民生命の伸展を示現し、五十億圓を突破した貿易は、諸種の條件を控除して猶且、資本と勞力と智腦を綜合した國民的產業推進力の優越を物語り、更に一方に於て事變以來十億に幾からんとする對滿投資を爲し、他方連年十億近かく公債を消化しつゝ二十餘億の財政を維持し、而も一般經濟界は次第に好況を招きつゝあるが如き、或は發明相接踵する科學的業績、或は又滿洲國の國勢を發展せしめて鞏固を加へた日

滿ブロックに、更に冀東政權を合流せしめて之を擴大した如き、或は我が東亞安定勢力を北支に礎定して實證を示した如き、是等の事象を通じて曾ては容喙恫喝を是れ事とした歐米諸國をして、何等權威ある發言を爲さしめ得なかつた如き、昨年一年の經驗は、皇國が危機を段一段克服し來り、實力を外容內實共に進一進せしめ來つた事を裏書する豐富な事實に充ちてゐる。

然し乍ら、此の躍進の跡を顧望して三思すれば、それは恰も喬木の愈々空高く成育伸張して、自然界の諸現象との摩擦それの壓力が一層切實に加重せられるが如く、却て非常時情勢が一層濃化且つ逼迫し來るであらうことを想はざるを得ない。

然るに或る一系の國民は、動もすれば躍進の現實に幻惑せられ、自已陶醉に陷らんとして、非常情勢の解消を云々し、或は非常時意識を側方に轉回せしめて自ら蹈晦せんとし、國民をして目前の安易に就かしめんとする傾向がある。

かくして生じたのが國內の指導的分野に於ける非常時觀の對立である。

一は即ち、皇國が一大飛躍を遂げんが爲め舊殼を蟬脫せんとする所から生ずる、國內的には新舊殼の摩擦、國外的には皇國の興漲を欲せざる外界の重壓、是を非常情勢と見るものであり、吾等の謂ふ所の非常時である。

他は即ち、かゝる非常時意識を昂揚する所に、却て國內の非常情勢が激發せられ、世界的不況に依つて齎らされた非常時情勢を激成する、と爲すもので、所謂自由主義體系を支持する一系の非常時觀である。

別言すれば、後者と雖も、今日明かに非常時感を有し、その故に絕大なる不安を抱いてゐるのであるが、その非常時觀の根柢には次の如き考へがある。即ち、今日の非常時は世界的のものであり、それは畢竟世界的恐慌の他の一面であつて我國の非常時もその一波動的現象に過ぎないのであるから、之が克服は自由主義經濟機構が持つ自律的調整に依つて可能であると爲すものである。

それ故に、彼等は前者の非常時を昂揚し之が對策を促進する爲めに、國內經濟に政治的强壓を加へ、國外に對して强力外交工作を加へることは

（一）國內的には、（甲）主として軍費の增大に基く財政的重壓となつて、（イ）一般經濟界に却て恐慌現象を齎らし（ロ）農村の窘窮を深化し、（ハ）遂には國家財政の破綻、然らずとするも民力の疲憊を招來し、（ニ）非常時極點に於て國外重壓に對する擊攘力を喪失せしめ、（乙）他方思想的に破壞的革命の風潮を喚起する。

（二）對外的には、却て列强を刺戟して對日壓力を徒らに强化加重する

一言以て蔽へば、餘計なことをしないで、ぢつとして居れと言ふのである。

之を現實の問題に就て一、二例を引けば、軍事豫算の如きも、對蘇政策を緩和し、對支政策も英米の驥尾に附して幣制改革を支持するやうな穩健策に出れば、滿洲事件費の大削減と共に著るしく減額することが出來る。又軍縮會議の如きも不脅威不侵略の原則は立派だが、それを突張るが爲めに、而して比率主義拒否に拘泥するが爲めに、財政經濟的に大きな重壓となる建艦競爭を招くやうなことをするな、と言ふのである。

是れは一見して穩健妥當の觀がある。從つて、現狀を以て意を滿たし、或は利已偷安を事と爲す者の耳裡に入り易く、さうでない迄も問題の根柢を極め得ない大衆の、事實は案外輕卒な常識的判斷に憑へ安いものである。

果して事實さうであるならば、吾等また何を好んで硜々齷齪するの要あらうやである。若し又然らずとすれば、かゝる

非常時觀は、爲すべき時に爲さざるの悔を、後に至つて國民に痛感せしめるものであり、速かに之を清算して、國策と國民の動向とを歸一せしめることが喫緊の時務である。

洵にかゝる不調和な二個の非常時觀が混在併存することは、抑々二者の可否如何に拘らず、現に

（一）國民をしてその歸趨に迷はしめ、從つて時局に對する不安を增大せしめ

（二）國民の一致協同を損ひ

（三）外國に乘ずる隙を與へ

つゝあり、況んや自由主義的非常時觀の根本的誤謬であることに依つて、

（一）國民の非常時工作に對する正義感と自信とを失はしめ

（二）かくして危機の最高潮時に對する精神的物質的準備を滯滯せしめ

つゝあるといふ致命的な危急狀勢を馴致しつゝある。

二　日本を阻む四强

不安に慄いてゐる混亂世界の第一の不安は、世界が歸嚮すべき方途を發見し得ないこと恰も、難船が島影を發見すべき方位を失つたと同一の狀態にあることである。

この世界的不安渦中の一角に重要なる地步を占める我國に於ても、第一の不安は、同樣に歸嚮の方角を確定し得ないことであり、而してかゝる戸惑ひ狀態に在ることが軈て第二の不安、戰爭の脅威即ち國防不安を招くのである。

何故なれば、現時の如き國際的不安狀勢の唯中に於ては、戰爭の脅威は凡そ如何なる國に取つても不可避である。只管現狀維持の彌縫策に汲々としてゐたフランスの如き、全く消極的に佛、獨二國の敦厚提議に對して八方美人的に應諾して身の安全を圖るのみであつた波蘭、國內强化と汎ダニューヴ諸邦との經濟的結合乃至は協力のみを企圖し、その以外には何等の野心を示さず何等の積極的國威伸展策を講じなかつたオウスタリー等々の如きも、或はドイツの動きに、或は佛蘇邦ドイツの間の雲行に、イタリーの絕望的衝動に、孰れも再戰の脅威を犇々と感じてゐる。

我國とても同樣である。假りに滿洲事變が無かつたとしても、さうして國內に何等かの形で炸發することを阻渴し得たとしても、支那並に列國の經濟的壓迫、蘇邦及びアメリカの軍事的重壓、イギリスの綜合的外交强迫は、日本の衝動をも武力阻止する威嚇的假面を以て、四方から我國に乘しかゝつて來たであらう。

即ち、今時の如き國防不安は、戰爭の脅威が存在してゐるといふことではなく、如何にしても不可避であるこの脅威を排除し得るや否やの點に在ると云はなければならない。

而も我國は滿洲事變を經驗したが爲めに、明かに列國の挑戰意志を、感情的に、理智的にさうして意志的に、二重にも三重にも募らせたことは事實である。

然るに我國を押包む國防不安の原因は、內外共に逐年些かも衰へないのみか、我國の躍進に正比例して擴大しつゝありと云へる。

先づ國外壓力の趨勢を一瞥しやう。

第一は北境蘇聯邦である。

日蘇關係の危機解消論のトップを切るものは北鐵讓渡の外交的勝利である。

北鐵讓渡の成立は、（イ）紛爭の根源であるべき他國領土内の權益を合法合意的に拋棄したものであること、（ロ）滿洲赤化の策源本部を撤收したものであること、（ハ）滿洲を通過する不凍海港獲得の意志を翻へした（勿論一時的ではあるが）こと等を以て、一の平和意志の表示であると言ふ事は出來る。

然し乍ら之のみを以て日蘇間の不安が解消したと見るならば、それは北鐵讓渡に於ける平和的價値の過大評價であると云はなければならない。蓋し、北鐵交渉開始の前後、荐りに日蘇開戰を流布した蘇聯の肚裡を付度すれば、（イ）日蘇開戰の曉には當然無償で喪失するであらうものを以て一定の評價額（勿驚一億七千萬圓）を受取ることが出來る、（ロ）之をその代線たるウスリー鐵道の複線化並に沿線の開發建設即ち五ケ年計畫の財源に繰入れることが出來る、（ハ）蘇聯の平和的態度を世界に宣揚することが出來る、といふ、之を滿洲國内に保有するより遙かに有利であるとする打算を看取することが出來る。

況んや他方に於て、彼の平和的意圖を裏切る幾多の事實が營々として積重ねられつゝあるのである。

その一は軍備である。

彼は既に戰時編成にして、且つ最新最鋭の近代的裝備を有する步兵十二箇師團騎兵三箇師團を基幹とする、兵員二十數萬の大軍をバイカル以東の要地並に滿鮮を包圍する國境の要點に戰略展開を完了し、何時でも滿洲國に進擊し得る態勢に在る。

その兵力は我が在滿部隊に數倍し、我が總現役數に匹敵してゐる。飛行機は事變前の八十機から十二倍の九百機に急增し、内一割餘は東京、大阪等を爆擊するに足る行動半徑を有する超重爆擊機であり、而もそれは過去一年間に約三百機を增大したものである。而も本國四千内外の總飛行機は陸上部隊と異り何時でも戰線に增援參加せしめることを得るものであることを考へなければならない。戰車は之亦事變前の百臺に約八倍する數に達し、同じく過去一年間に約二百を增加してゐる。加ふるに、滿蘇國境の戰略要點には必ず、防禦陣地であると共に攻擊の據點たるべき堡壘、近代築城の粹とも云ふべき鐵筋コンクリートのトチカ陣地を無數に構築してゐて其數も無慮數千と稱せられ之が爲めに投ぜられた經費も十數億留の巨額に達すると云はれてゐる。

又、若干の河用砲艦を有するに過ぎなかつた極東海軍も、玆兩三年の間に五十隻の潛水艦を浦鹽港内に保有するに至つたのである。

而して軍事豫算を見るに、陸軍次官トハチエフスキー元帥の言明によれば、昨年度の豫算は六十五億留で實行豫算は八十二億であつたが、今年度の豫算は約その倍額百四十八億留に增額せられ、ゲ・ペ・ウの豫算を加算すれば百七十億、即ち前年度の約三倍一九三三年度及び一九三四年度の約十倍に達する狀況である。

以上の兵勢は、緒戰に勝を制し敵に大打擊を加へんとする彼の作戰上の要求に略合致したものであると云ふことが出來る。

その二は第二線の經濟工作である。

極東經濟工作は第二次五箇年計畫に含まれる一連不可分のものであるが、それは次の三計畫である。

（一）バム鐵道の建設

（二）　ヤクート共和國の開發

（三）　極東綜合工業地帶の創設

バム即ちバイカル・アムール鐵道は、バイカル湖の西タイシエットからヤクーツク共和國の要市タモツトを經て、一はコムソモリスクへ一はオホーツクに至る約三千粁の大新設工事であり、之にはザバイカル及びウスリー線の複線工事並びに哈府、尼港線の新設が附隨してゐる一大鐵道建設事業である。

ヤクート共和國は北海に面する半開地帶であるが、その全土至る所に金を埋藏する一大寶庫であり、バム沿線の有名なレナ河流域、アンガラ河、ウイティム河と共にソヴエツトの蓬萊島である。その他石炭、鐵鑛等の各種鑛物、木材、毛皮、漁獲物等の各種資源があり、將來の一大産業地帶である。

極東綜合工業地帶は、一千四百億噸を埋藏すと云はれるブレーヤの大炭田、五億噸と推算される小興安嶺の鐵鑛とスウオボードヌイの耐火粘土とを結び附けた重工業の據點を中心とし、哈府から浦鹽に至る一大軍需工業地帶及びコムソモリスクの造船所、兵器廠、飛行機、自動車製作所、化學工業等の大軍需工業地帶並にバイカル湖西方のアンガラ工業地帶、同湖東方のペトロフスキー工業地帶等を打つて一丸とした厖大なる工業建設事業である。

此の三者を綜合した極東經濟工作は、經濟的文化的意義の大いなる事勿論であるが、同時に戰略的意義の極めて重大なる事を看過することが出來ない。

即ち是等三大事業の完成は一方に於て極東の獨立を可能ならしめると同時に、他方に於て極東を一層歐蘇に近づかしめるものである。蓋し、バム鐵道は現在の南部シベリア線と併行する北部シベリア線となるもので、之に依つてドン並にウラルの大工業地帶はヤクート國並にブレーヤ工業地帶との距離を著るしく近接せしめる。之を日露戰當時に化して資源地の著るしき東漸であると云へる。かくして軍事的には、シベリア鐵道の戰時輸送能力を倍加（日露戰當時に比較すれば、複線にしたこと、列車の運轉數を增加したこと及び北部線を加へた事とに依つて數倍となつた譯である。）すると共に、現在の南部シベリア線が受ける飛行機よりの脅威を北部の安全地帶に退避するものである。然も、極東の一連の大産業地帶の完成連絡は、極東に戰時自給自足能力を附與するものでもある。

換言すれば、前記諸戰必勝の態勢を長期に亘つて維持推進せんとする遠大なる戰略的謀志ありと云ふことが出來るのである。

翻つて蘇聯當局の意圖をその外交工作及び國內に對する首腦者の言說に徵して觀察するに、豫て歐蘇境邊の諸國との間に不侵略條約並に侵略國定義條約を締結して安全保障の準備を築設し來つたが、昨年五月遂に佛國との間に相互援助協約を締結して、國際聯盟理事國としての聯盟利用と共に歐洲方面に對する政治的防備工作を大體成就した。然も昨今傳ふる所に依れば佛國、チエツコスロバキア國との間に軍事同盟條約の締結に成功した樣である。然し精神に於ては軍事同盟は昨年の條約締結の際、既に成立してゐたと云ふ事が出來るのである。

而して本年一月十日總理モロトフは、（イ）　軍備擴張の目標は、軍事同盟を結んでゐる日本と獨逸並に波蘭に在り、（ロ）　その手段は他領を通じて之を脅威するに在り、（ハ）　而して邊境諸國より逐次世界を赤化せんが爲めには兵力が不足せることを力說し、極東赤衞軍司令官ブリユツヘル元帥は多年極東の獨立作戰能力の擴充を中央に進言し、次官トハチエフスキー又、モロトフの演說を引用し、日獨兩國の挾擊を前提として、極東の獨立作戰能力の充實に鋭意努力しつゝあ

ることを強調した。

更に眼を滿支の蘇聯國境に轉ずれば、滿洲國境に於ては蘇軍及び外蒙軍の國境侵犯の不法事實頻々として起り、昨年中だけでも數十件の夥しきに達し、特に本年に入つては、著るしく惡質となり、我國が鋭意哺育裁兵しつゝある滿洲國軍に惡性の宣傳を爲し、一部の不良分子をして背反せしめるの事實を生ずるに至らしめた。是は即ち我國の滿洲樂土建設の根柢に禍害を加へんとするものであつて、遂に關東軍に異常なる緊張をさへ與へるに至つた。而もその背後には、滿洲外蒙間の外交渉を操り、之を決裂せしめ、而して蘇蒙間には、本年に入つて、外蒙に於ける蘇軍の增强並に蘇軍の外蒙援助を約束した軍事協定が訂立せられたと報ぜられた。又支那國境に於ては、新疆が完全に蘇聯の勢力範圍と化し、江西を逐はれて蘇支國境近くに逃れた十萬餘の中國共産軍は行く〳〵各地の共産軍を併せて二十餘萬となり、今や內蒙北支に迫らんとして居り、蔣介石と蘇聯との間には右共産軍の滿洲北支に對する軍事行動に就て何等かの默約ありとさへ云はれてゐる。

吾々は蘇聯の對日滿進擊性に對して、敢て想像を逞うせんとするものではないが、如上の軍事的並に外交的情勢と、世界を共産主義國化せんとする國是、並に帝政たると蘇聯たるとを論ぜず、その地理的要求に基き、日滿支三國が包攝する太平洋に海口を求めんとする一貫不變の傳統的外交政策及びコミンテルン大會に於ける動向とに鑑みて、蘇聯に絶對必勝の信念を與へることの、我國を累卵の危きに置くものであることを切實に惟ふものである。

されば東亞平和の爲め、日本の安危の爲め、滿洲國保全の爲め、北支經濟圈の確保の爲め、又進んで各種の懸案を解決し、北境の平和を永久に持續する爲め、蘇軍の軍備に對抗し得る軍備を保有しなければならない。在滿、在北支軍の充實を促され、國內兵備が更に全般的に改善補强せられなければならぬ事情は、かくして益々逼迫しつゝありと言はなければならない。蓋し、我軍の兵備は、滿洲國の大領土をその自衛權內に包攝し、北支境邊にまで國防の第一線を擴延したる今日に於ても、依然として事變前のそれと殆んど異る所なく、兵力は平時二十數萬であり、滿洲、北支方面に手薄を感じ然もその裝備は未だ近代化に對して甚しく不十分である。勿論精神的要素に於ては他に比肩するものなき確固たる用意はあるが、唯形而下の威力に對しても之を輕視し得ない將來戰を想ふの時、前述の如き蘇聯邦の近代化並に增量に比するときは空軍の充實、部隊の機械化等に對してもその增强並に高度化が多々益々必要なることを感ずるものである。

第二は西隣支那である。

凡そ國際關係に於て永劫不變の親善關係があり得なかつたことは、歷史の明證する所である。友好關係が比較的長く持續し得るのは、利害の相反するに至ること比較的尠き遠隔の諸邦間の友誼關係であつて、利害が何等かの形に於て相近接する諸國間の關係は、時運の進展に伴つて轉變常なきが定である。而して、利害或は交錯し或は全く相反する接境國は概ね抗爭力鬪するのが宿命であつた。然もかゝる抗爭の反覆は、遂には拔くべからざる歷史的反目、例へば獨佛二國間の永遠の憎惡。を、恰も兩國民の第二次的本能たらしめる。

日支間の關係は所謂同文同種、輔車相倚るの關係になければならぬ筈であるに拘らず、今日迄の關係は、不幸にして此の規範を脫し得て居ないのである。

現在、支那の抗日排日を、日本の武力的威壓の結果であると云ふものがある。短見も甚しと云ふべきである。成程、實力政策が薪に油を注ぐ結果となるべきことは、一面の事實であつた。事變直後の抗日は、列國の支援があつたとは云へ、確に之の事實であることを示したものであつた。然し乍ら、支那は理に服せずして力に屈する國民であり、信に倚らずし

て、弱力と見て理不盡に壓倒する國民である。而うして力次第では謀策を用ゐるのが例である。汪兆銘歸來後に於ける一面許容一面拒否、一面沈默一面抗日の政策はその現はれであつた。然らば、佛面佛心の親和政策で臨んだなら如何？　彼は事變後今日迄の折衝に於て明かにし得た如く、滿洲の支那歸屬を徹底親日の絶對的前提條件としてゐる。そこで彼に滿洲の自由裁量を許して、日支全面的徹底融合を求める時は、次には彼は關東州を、更に臺灣、朝鮮を返せと言ひ募つて來るであらう。是は過去の歷史に徵して火を睹るよりも瞭かなことである。そこに諦め――宿命觀的感情的忍從はあるが、思ひ切り――理性的意志的斷のない國民性の弱點を曝露してゐる。その故に支那の抗日をその國民性に歸するものがあるが、それは一つの事實ではあつても、未だ穿つて眞相の全貌を明かにしたものと云ふことは出來ない。

かくして支那今日の決定的動向は、唯一つの抗日であり、それは今日までの理念に隨へば、力の衡平關係に支配せられる。

昭和九年の初頭に始まつた支那の向日轉向的傾向は、昨年の五月頃に至つて限界に達し、北支問題を機轉としてバロメーターは急降下し、低氣壓來を豫感せしめた。

昨年春、南京の獨裁官蔣介石は我が有吉大使、磯谷武官と數次會見して向日の意あることを明かにした。日本側は、支那が眞實誠意して日支融合を考へたのなら、之に應諾するに吝かでない、がその爲めには須らく實證を示すべし、口で言はんでも國交上の事實に於てその意志を明かにすべきことを求めた。之に對して蔣が排日停止命令を出し、排日が稍々沈靜した事は當日新聞に報道せられた通りである。

然るに、排日の表面的沈靜以外には、所謂實證は何等示されなかつた。却つて蔣の眞意に對する疑惑の方が一層濃く現はれて來た。疑惑とは、（イ）何等かの排日工作を實行する爲めの僞裝手段ではないか、（ロ）英、米を誘引せんとするブラツフではないか、の二點であつた。

果然疑惑は事實であつた。

その第一は蔣の北支工作である。北支は既に事變前に於て中南支から離反しつゝあつた。それは北京政權が南京政權から獨立してゐた事と、民族關係に於て北支が寧ろ滿洲に近接してゐた事、貿易關係及び資本關係から日本を主とする外國に依存し、交通關係に於ても南支よりも外國に依存することが多かつた。從つて事變後は急轉して北支の日滿依存度を高速化した。そこで、南京政府は北支に對して、如上凡ての關係に於ける日滿依存關係を南京のそれに回轉せしめんとした。北支特に戰區を策源地とする滿洲攪亂策動、滿支間の民族關係の遮斷、是等に役立たせる爲めの藍衣社の活動、C・C・團等黨部の暗躍、南京の政治的支配權の確立、中央三銀行の條例改正に依る上海資本――浙江財閥の北支金融的支配權の確立等々の諸政策が之れであつた。之は明かに日滿ブロックの北支擴延を意識的に阻止せんとするものであつた。

その第二は英國との急速なる握手である。浙江財閥の一巨頭にして特に宋子文、孔祥熙等と密接不可分の關係に在る李銘は、九年十二月在支英國銀行に二千磅の借款を申込んだ。此の時英國は即座には快答を與へなかつた。所が、日支提携の風船が揚ると見るや、英國は遽かに動きを活潑にし、借款商談が俄然進行した。

而して日支提携は恰も撒き餌の如く池底に空しく沈んで了つた。

即ち蔣の北支工作は梅津何應欽協定を以て一段の局を結び、後に自治運動を招徠し、冀東政權の獨立、冀察政務委員會の成立なる實果を結び、英國との握手は英國の支那幣制改革援助借款の成立を收獲した。

支那の幣制改革が失敗に終るのではないかは今日略明かとなづて來た。何故ならば、南京政府が、その財政建直し、經濟回復の一手段として、且又派生的希望として北支との縒りを戻さうとしたものであつたとすれば、明かに拙策であつたからだ。蓋しその最善第一の策は日支の融合、日滿支ブロックの實質的可成を措いて無いからである。次に援助を約した英國は、之に依つて支那財界の好轉と共に在支英國商權に活を入れる事が目的であつたのであり、後に至つて、之を緯とする經のあることも明かとなつた。即ちそれは英米の世界金融爭覇の一場景であつたことである。

かくの如くして、日本は英國の尻馬に乘つて大きく打棄られる馬鹿を見ないで濟んだのであるが、同時に支那が遂に抗日以外に何ものもなかつたといふ事が明かとなつた。但し、昨今蔣が行政院長に就任してからは、或は何等か悟る所があるのではないかと思はしめるものあるに至つた事は支那の一進歩で、相願はくば軌道に乘つて貰ひ度いものである。

扨て支那が單獨で日本に挑み來ることは考へられない。然し乍ら、蘇聯邦乃至は英米との間に日本が事を構へるが如き不幸なる事態が現出するに至ることありとすれば、支那の挑戰と兵備とは忽ち我が脅威となる。

支那陸軍は、中央軍が歩兵七十四師十六旅、騎兵五旅計九十萬、之と行動を共にすべき舊東北軍十五萬がある。然し、萬一の場合には、他の地方軍及び各地雜軍と雖も考慮の外に置くことは出來ない。而してそれは合計百萬内外に達する。又日ソ對戰の場合を豫想すれば、コミンテルンの指令に依つて動く共産軍二十餘萬がある。

空軍は中央空軍三百餘機であるが、何れも主として米國より購入した精鋭であり、内約百機は杭州に在つて米國教官に依り軍事教練を受けてゐる。廣東空軍は二百餘機、廣西空軍は五十餘機であり、何れも米、英、獨人に依つて訓育されてゐる。即ち計約七百機を有してゐる。

最後に最近の情勢として特に指摘されなければならないのは、支那各政權の空軍擴張計畫と共産軍の北支に對する脅威とである。

第一に中央政府は、昭和九年に航空三年計畫を樹て、昭和十一年末即ち本年末までに、偵察機三百五十、驅逐三百、輕爆二百、重爆百、合計九百五十の擴張增大を圖つて現に實施してゐることである。同樣に廣東空軍も擴張計畫を作り、省内に飛行機製造工廠を新設して之が促進を圖らんとしつゝある。

第二に、江西を脱出した中國共産軍は西方邊境地帶を通過して、昨年秋以來北支に侵入せんとする態勢になつた。綏遠陝西、甘肅等に在る共産軍は、新疆或は外蒙の蘇聯邦と直接交渉可能の狀態となつた結果、北支特に内蒙に對する脅威が著るしく加づたのである。蘇聯の動向と併せて、我軍武力の充實を要求する必至の情勢であると言はなければならない。

第三は太平洋東岸の米國である。

人が事物の正確なる判斷を誤るのは、多くは利害が視線を歪曲するが爲めである。日米關係の正視を誤るもの亦是れである。日本の輸出生糸の八割八分が米國向であり、それが米國輸入生糸の九割であると云ふ事實に依つて、日本の經濟界が日米貿易の杜絶を欲しないのは極めて當然である。況んや米國からは又巨額なる棉を輸入し、それは又日本輸入棉の一大部分であると云ふ事實が米國をして同樣な考へを日本に抱くであらと想像することも無理からぬ次第である。

何故ならば、現在の自由主義經濟機構に於ては貿易の一大部分が礎と杜絶すると云ふことは直ちに全經濟面の崩壞を意味する至重至大なる出來事であるから、一國經濟の自由主義的維持安定を以て一國の存立そのものであると考へる彼等であつて見れば、何を措いてもかゝる出來事を惹起すやうな事態は阻止しなければならないのである。

此の希望的觀察が、過去の樣々な歴史の回想と相俟つて、日米戰ふことなしとする結論を抽き出して來たのである。之は明かに重大なる過失に陷づてゐる。それは即ち、纖維工業關係者がアメリカを支配してゐるが如き觀察を出發點としてゐることである。

吾々は之に對して唯一つの事實、上海事件中に起つた米國政府内の評議を想起すれば足りる。即ち、滿洲事變の勃發と同時に米國々務卿スチムソンは我國に一の覺書を致した。然るに右覺書は、具體的に條約を擧げ、具體的に場合を指摘して、條約違反であることを主張したものであつたが、かく具體的に指示することは極めて强硬なものであることを意味するのである。然も皇軍がその警告に何等介意する所なく現地の必然的推移に從つて錦州を占據し、更に支那民衆の昂奮を巧に誘導した廣東派の策と之を逆用した蔣政府の工作とに依つて所謂上海事件が續發するに及んでスチムソンは時の海軍作戰部長ブラット提督に實力發動の能否如何を諮問した。優越を信じてゐたスチムソンは、意外にもブラットの實力行使を不可なりとする答申を得て、日本の武力封鎖を斷念するの已むなきに至つたのである。

蓋し當時に在つては、華府會議以來、現有勢力を基準として軍縮條約を締結し乍ら、我國は超過噸數の廢棄を爲すの要あり、米國は條約所定量に達して居らず、爲めに實勢力に於ては却て我は彼を凌ぐものがあつたからであつた。

其時、若し、兩國海軍が條約所定の比率に在つたとすれば、スチムソンが日本に對して何をやつたかを想へば、今更に戰慄を禁じ得ないものがある。

當時の米國政府は恐らく、日米貿易の區々たる數字などを考へては居なかつたらう。英米聯合艦隊とその優勢なる空軍が日本を制壓し、滿洲は素より、全支に對する各種の政治的經濟的覇權を獲得し、或は臺灣、朝鮮、千島等に、或は政治的の或は軍事的の要求を貫徹達成する時を空に描いてでも居たことであらう。然るに無慙、彼の夢は破れたのである。

轉じて華府條約に代るべき新軍縮條約訂立を目的とし、何等得る所なくしてロンドンに決裂した軍縮會議前後の情勢を考察しやう。

會議の決裂は、會議前に豫想せられた如く、主として日本と英米二國との間の、軍縮方式の基礎方針の根本的背馳に依つて事實となつたのである。

我國は、不脅威不侵略を原則とし、先づ共通最大限を設定して各國の保有量を局限し、然る後相互に國情を參酌して互讓妥協、一の協定を作製しやうと主張する。然るに米國並に英國は依然として華府、倫敦兩條約の基礎であつた差等比率主義を固執し、『六割海軍』を强要し、聽かなければ製艦競爭で之を實現すると威嚇した。

吾々は米國に於ける二個の重大なる矛盾を指摘することが出來る。

（一）は比率主義自體の誤謬である。米國に從へば米10―日6で、日本が安全だと云ふ。假に之を華府會議に於ける我主張である10―7としてもよい。それならば日本から見ても安全と迄行かずとも、どうにか對抗出來る勢力比であるとする。然らば逆に米國は7―10となつても安全であるべき筈であり、從つて10―10なら勿論絶對安全不脅威であるべき筈である。然るに米國は、資源、工業設備、人口其他萬般の關係に於て遙かに有利な地位に在り乍ら日本を劣勢に置いて始めて安全なりと主張する。

茲に現はれた馬脚がある。即ち、10―6は米國がその全艦隊を率ゐて太平洋を押渡り、日本近海に進攻して來た時に途中に於ける日本海軍の奇襲に依る損害を控除して猶且つ優勢を維持しやうとする意圖に出發してゐるからであ

る。換言すれば、眞逆の時、例へば第二の滿洲事變の如き際に直ちに全海軍を出動せしめて日本を取つて押へることを目標としてゐるのである。而もエベリー提督は『自國を防衛するためならば弱少海軍で足りるが、支那の門戸開放の爲めには大海軍を必要とする』と公言してゐる。

（ロ）は之と關連した安全感平等の主張である。即ち日本の平等論に對して、平等は噸數の平等に非ずして安全感の平等でなければならない、故に東西に兩洋を控へ、比島を有する米國は、日本より不安全を感ずること大なり、と主張する。之は全く堅白異同の辯で、太西洋艦隊は四十二時間にしてパナマ運河を通過し得る事を演習に於て確め、一週日を出でずして太平洋艦隊に合體することの可能性を認めたのであるから、前後に兩洋を有することは何等不安全に關係しない。況んや、自給自足は可能であり、歐洲との貿易に何等の支障を感じないのであるから、アジア大陸以外の貿易を杜絶せしめ、背後に赤軍潜水艦隊を控へ、且資源に乏しい日本に比すれば安全度が遙かに高いと言はなければならない

玆に包み切れない尻尾がある。即ち、不公正なる高比率を維持せんが爲めの、取つて附けた屁理屈である。斯く迄して高比率を維持して對日絶對優勢を確保しやうと云ふのは、明白に西太平洋に於ける積極活動の可能を得樣が爲に外ならない。而してそれはスチムソン、ブラット兩者の諮問答申を想起する迄もなく、華府諸條約、就中九國條約の確保の爲め、屢々發した聲明或は滿洲の石油統制に關聯して同條約を援用して我國に寄起した抗議的覺書等に見て、東亞の安定、東亞の國際關係調整に威力を以て指導的地位を求めんとするものであることは一點の疑ひがない。

別言すれば、東亞に於ける日本の安定勢力を、その實力に依つて否認せんとするものであり、東亞の一變したる新情勢を新なる發足點として東亞、延いて世界の安定を圖らんとするを拒否せんとするものであり、滿洲事變當時に於ける感情意圖を全く變更する意志なきものであると言はなければならない。

一部には、米海相スワンソンの片言、太平洋二分論並に米國內の殖民地再分割論、或は純正モンロー主義復歸論（即ちアジアから手を引くこと）等を見て、結局アメリカはアジアから手を引くであらうと樂觀するものもあるが、吾々は輕々に之を信じ得ないものである。

何故ならば、現在我が海軍力の實勢は略米國と同等であるが故に、米國當局は或は緘默し、或は日本のアジア政策に對する不干涉主義を口にするかも知れないが、現狀のまゝ推移して、我が實勢力が本年末對米八割一分に低下し、更に一九三九年六割三分に落ちた時果して、彼が沈默を守るであらうか？　彼は、新聞紙に屢々報ぜられたるが如く、建艦に狂奔し、航空機の一大增勢に大童となり、他方に於てアラスカ及びアリューシャンに銳意軍事施設を爲し、ハワイの前線に要港乃至は空軍根據地を建設し、グアムにも海空軍根據地建設の計畫を有してゐるといふ。

而して軍縮會議の決裂は、必然に米國の建艦計畫その他の軍備施設に拍車を加へることは寧ろ既定の事實である。吾々は、米國が絶對優勢の大海軍を建設し終る事を、甘受してよいであらうか？　獨逸を敗つたものはフォッシュ元帥の頭腦であつたかも知れない、或は米國の石油であつたかも知れない、更にまた獨逸國民の意氣の沮喪であつたかも知れない。が然し英國の絶對優勢海軍が獨逸の劣勢海軍を完全に封鎖し得た事が明かに獨逸に與へた最初の致命的重傷であつた。

現存比率主義の海軍條約に從はんか、比率完成の一九三九年以後の日本は最大の危機に直面する。同時に倫敦會議の決裂は米國の反撥心に刺戟を與へた。孰れにしても免れ得ない逼迫情勢であるが、後の場合は吾々の心掛次第に完全に乘切

ることの出來るものである。

第四は南海の英國である。

本年一月九日附東朝は紐育特電として、ヤングの著書『强力なる米國』に於て公表せられた前紐育タイムス社長オツクス氏の遺稿が曝露した華府會議前に於ける英米外交の秘史を報じて來た。右電報の要點は、時の英國海軍長官リーがオツクスを通じて米國政府に華府會議の開催を慫慂し、その結果、（イ）英米同率、（ロ）日英同盟廢棄、（ハ）太西洋は英國の責任太平洋へ米艦集中、の三個の諒解が成立し、かくして華府會議が開かれることゝなつたと云ふのである。

玆で吾々が注意すべきことは、英國が太平洋鎭臺としての日本を、その利害打算から米國に乘替へ、而も日本にお禮を云ふことの代りに後足で砂を蹴かけたといふ事である。

人道とか平和とか修辭學は滿點であるが、要するに大戰で疲弊した英國が、之は亦大戰成金の米國と建艦競爭を爲すことに堪えられなかつたので、米國の實勢力を認め、平和と人道の名に於て、米國を英國の同率に喰ひ止める爲めの軍縮會議を、米國をして開かしめたのである。

そこには英國の二つの明察があつた。

第一は、米國が英國に代つて世界を指導する第一國となる事を見通した點で、英國はその爲め最も可能なる海軍力の英國凌駕を阻止した。その肚を見透かされない爲め、日本を惡者にして之を種に供したのである。

第二は、支那に於ける獨逸の根據地を拂拭した日本は、軈て支那を支配しない迄も、在支商權制覇の競爭に於て英國を後へに擡着たらしめるに至るであらうと見通したことである。その故にこそ、日英同盟を冬扇夏爐、あつさり破棄して、自己の商權を護り、日本の進出を阻止し、併せて米國にも餘り乘出して貰ひ度くない爲めの支那に關する九國條約、太平洋四國協約を調製したのである。

日英同盟は日露戰爭以後、日本に取つては殆んど何等の役割も勤めて居なかつた。唯英國に對する情誼の證據として進んで之を繼續維持して來たのであつたから、何等惜しむ所ではなかつたが、『利益こそ永遠の友邦である』とする英國の一貫せる外交原理が、日本の情誼を仇を以て返へしたに等しい行動を何等の躊躇なく取り得る英國であることを銘記しなければならない。

而して今や、英國の利害は明かに日本と衝突して居る。英國の商品は到る所に於て日本品に打負かされた。最初の鍬を入れた滿洲は日本の無二の盟邦と化し、北支の權益も經濟的に壓倒され、支那商權は著るしく日本の蠶食を蒙つた。日本の國威進展はアジアに於ける英國諸屬領に對する異常な衝擊となつた。植民地の擴大こそ必要である英國が、日本の强大に依つて逆に退却を餘儀なくされた。

かくして日本を萎縮せしめ、日本の發展を阻止することが英國目下の緊急極東政策となつたのである。昭和七年三月輸入稅法を設けて日本品に差別的高率關稅を課した英國は、世界に於ける日本品排斥のトツプを切つたものである。次で同年七月十一日オツタワ協定を成立せしめて更に關稅を改正し、之を帝國內の諸邦屬領に擴大し、遂に全世界の邦品壓迫鎖出の俑を作つたのである。

事變に際しては、屢々我政府に威嚇的警告を發し、駐米大使を國務省に派して日本經濟封鎖を提議せしめ、前記スチムソンに關する挿話を作出する原動力となつた。調査團長リツトンは英國の代表者であつた。聯盟總會に於ても、最後まで

日本を強壓した。昭和九年から十年にかけて、太平洋進攻を策定し、シンガポール軍港を強化し、和蘭との間に對日軍事同盟を締結し、濠洲、新西蘭の海空軍强化を圖り、防備制限協定を破つて香港防備の擴大强化を實施して來た。

昨年、日支和解の傾向顯著となるや、一度默殺した支那の借款申込に急遽應諾の色を見せ、リース・ロスを派遣して、日本を打診しつゝ支那との握手を策し、日支間關係の調整に水を差すの態度を執つた。

這次の倫敦軍縮會議に於ても、英國は八萬浬の交通線を有する聯邦構成の脆弱性を高調して高比率を要求した。之は近代海軍の機動性、飛行機の進歩、通信の完備、英國が有する絶大なる第二線軍備大商船隊の存在を隱匿しての僻論であつて、畢竟、世界の何國に對しても優越を確保せんとする意圖に外ならない。

かゝる意圖は不脅威とは凡そ正反對の事實であり、軍縮とは全く併行背馳するものである。然るに英國政府の意向をそのまゝ代辯せりと見られる海軍通バイウオーターは、『日本の會議脱退は國家の威信保持の爲めであり、國家の安全保障の爲めではなかつた。日本を除けば今日の會議程希望に滿ちたものはなかつた』（一月十六日東日）と評してゐるが、之こそ語るに落ちたものと云ふことが出來る。

蓋し是れ恰も、脆弱性の主張が他國の脅威となることは口を掩ひ、自己の優越を保持せんとするドグマたることゝ全く同樣、我國の不脅威不侵略の原則には一顧をも支へず、只管己れを以て他を推し、かくして己れの眞情を秘匿せんとした宣傳的曲論に過ぎないからである。

玆に之れを評論する遑はないが、上來略記した英國外交の基本方針並にその極東政策に鑑みて、英國が終始米國と相謀りつゝ極東に何を試みんとするかは、細說せずして明かである。決裂後に於ける米國海軍の動向と軌を一にすと考へて然るべきであらう。

第二　非常情勢と日本の動向

一　國際非常情勢の步趨

我國を包圍する國際非常情勢は上記の如く、正しく『孤立日本の姿』を次第に色濃く浮出させつゝあるが、然らば彼等は抑々何を目當に重壓を加へ來るのであるか。

その動向は本質に於て一つであるが、便宜之を分析すれば、

（一）　東亞の新事態を否認せんとする消極的目的。

（二）　彼等自身の非常時艱を東亞に於て一部たりとも解消せしめんとする積極的目的の二となすことが出來る。

東亞の新事態とは、滿洲が、事變を契機として名實共に支那中華民國から離脱して完全なる獨立國となつたこと及び、その滿洲國成立の全過程を我日本が積極的に支援し、遂に兩國が不可分の同盟國となつたこと、此の二つの現象が必然に釀し出した東亞に於ける日本の國際地位の變化並に之を中心とする東亞局勢全般の變化を指稱するのである。

之は寔に嘆稱に値すべき桑滄の變であると云へるであらう。而して之を數十年の後に於て見る時、恐らくは日露戰後に於ける我が國際地位の躍進と相對比して、具體的に考較し得ることであらう。

我國と滿洲國との同盟關係は、西歐史觀的觀點から見て合邦直前の日鮮關係乃至は合邦後のそれを巧妙に僞裝したるも

のとして映ずる程緊密なるもので、經濟・政治・軍事は勿論文化的にも全く一體不可分のものである。從つて第三者から之を見るが如く、恰も日本が滿洲國にまで擴大されたと同一の結果となつたのである。

それ故、經濟部門に於ては、人口九千餘萬から一億二千餘萬となり、面積又倍增し、豊富な各種資源を加へ、同時に尨大なる殖民地を獲たるかの如き異常なる飛躍を爲し、自給自足への重大なる數歩を進めた。又軍事的部門に於ては、その故に國防の物質的基礎充實に著大なる進歩を遂げた。唯、之が爲め、從來僅かに朝鮮東北境と樺太とに於て接壤して居たに過ぎなかつた蘇聯と滿洲を通じて、千數百哩の長きに亘つて國境を隣するに至り、我國の戰略的地位に之亦格段の變化を齎らした。同時に境界の不分明なる內外蒙古に境を接し、北支に於て南京政權と大陸に於て直接交渉を持つに至り、同樣軍事的に重大な變化を齎らした。外交的にも、現に頻々として生起しつゝある滿蘇國境問題の如き、事案生起の可能面を擴大し、朝鮮、滿洲、シベリヤ、蒙古並に北支等を始めとして、南海の諸領邦、延いてそれ等を通じて英、佛、蘭等の諸國及び米國にまで波動を及ぼしたのである。

吾々は、日本の滿洲北支資源への近接、日本工業の實質的飛躍性、支那貿易の激變等の經濟的な斷片的事實、或はシベリヤ鐵道、カムチヤツカ、アラスカからシンガポールにまで衝動を與へた戰略上の變化だけを見ても、極東の新事態が如何に深大なる意義を國際政局上に有つものであるかを感得することが出來る。

然るに是等列國の關心は、此の新事態を次第に事實上の必要から認めなければならない方向に進みつゝあるとは云へ、その認め方は、舊來の國際法等に於ける『既成事實』的意義に於て、之を認めざるを得ないと爲す類のものであつて本心は此の新事態を否認し、出來るなら事態を原狀に還元せんとするに在るのである。

米國前國務長官は、昭和八年一月七日の對日覺書に於て、かゝる新事態の合法性並に新事態を發生確認する一切の協定を認めない旨を强調し、更に二月二十四日、上院外交委員長ボラー宛書翰の形式を以て、『歷史の示す所に依れば、結局に於て、支那の奪はれたる權原及び權利を支那に回復するに至るべきである』と言つた。所謂スチムソン主義（又はフーヴア主義）といふもので米國極東外交の一指導精神となつたものである。而して次の責任者たる現ルーズヴエルト大統領及びハル國務長官も、實力發動はなければ引つ込みの附かない樣なスチムソン式抗議こそしないが、滿洲國の石油專賣制に對して九國條約を援用する抗議的照會を日本政府へ發した。これ蓋しスチムソン線を一歩も離れてゐないもので、彼の眞意奈邊にありやを端的に觸知せしめるものでめる。

英國も國際聯盟に於て、佛國と共に列國をリードしてスチムソン主義を支持した。上海事件に對する日本斷罪、最後の聯盟總會に於ける滿洲國不承認決議並に不承認の實施及び違反監視の委員設置の如きはその顯著なる一班の事例であり、和蘭を誘つて米國と共に行つた前記石油抗議は、右の主義が昨今に於ても依然として持續されてゐる事の實證である。時々、經濟視察團の如きものを日本滿洲の兩國へ派遣するが、是れは經濟的利益だけを慾張らうとするものであつて、滿洲國承認とは何等の有機的關係のないものである。彼等には吾々の見て以て不可分なりと思ふかゝる條件を峻別して當然となす分裂思想、分析思想があり、かゝる分析思想に慣熟したる外交を洗練されたる教養ある外交なりと考へてゐるのである。それ故、かゝる一見好意的なる視察團如きの來朝に依つて眼鏡を曇らせてはならない。

然らば何故彼等はかくも執拗に新事態を否認し、機會さへ到來すれば『權原及び權利を支那に回復』せしめやうと考へてゐるのか。

即ちそこに彼等の經濟的非常事態解消の一つの途を求めやうとする積極的目的があるのである。

英、米、特に英國の如きは、五大洲に跨り世界の四分の一の面積を擁する大領土を有してゐるが、それが既に諸々の理由から殖民地的利用の限界に達し、尙其の上の殖民地を求めることに急なる狀態に達してゐる。領土が大であるから其上に構成せられた經濟組織も必然に廣大であり、從つて新に求める所も大ならざるを得ない譯であり、更にその故にこそ大海軍保有慾も旺盛なのである。それ故に、新市場として殖民地利用の價値大なる支那滿洲等は、彼等の慾望が集中せられてゐる所であつた。支那は開發せらるべき資源を有ち、巨大なる人口と數階段に跨る經濟組織の國であるが故に、原料供給地でもあり、商品並に資本の市場でもあり、且又かゝるアジア的狀態にある事は、西歐諸國の經濟的要求を長期に亘つて充足すべき可能性がある。

されば支那を出來る丈多く殖民地化（形式などはどうでもよい實質的に）することが出來れば、それだけ彼等の經濟的非常情勢を鎭消することが出來るのである。

然るに世界の動きは彼等の希望とは正反對に、前方東亞に於ては事變を機轉として異常な生理的變化が起り、日本の强力な發展が彼等の市場を狹隘化し、後方歐洲に於ては、獨逸が殖民地返還の希望を表明し、その軍備を充實して暗に之を督促し、イタリーは大戰參加に際して約束したる殖民地の引渡しを求め、遂に爆發してアフリカに遠征する等、既成獨占資本主義國は彌が上にも焦燥を煽られた。かくして彼等の日本壓迫が倍加される。

此の意味に於て、彼等の我國に加へる重壓即ち我が國際非常情勢が、滿洲事變後に於ける一連の我が政策の反射作用であるとする說が成り立つのである。何故ならば、事變並に其後の一連の我が政策が不可避だからである。

然るに自由主義的非常時觀は、我が政策の緩和に依つて國際非常情勢を緩和する事が可能であると主張するのであり、その意味に於ける反射作用であると言ふのである。之は右の不可避性を認め得ない所に救ふべからざる誤謬がある。

二　非常情勢の不可避性

今日に於て緩和的方策を採り、妥協的態度を執るべしとする主張は、（イ）滿洲事變後に於ける一連の政策を中道にして方向變換すべしと說くものであつて、今日迄の拮据經營を一瞬にして畫餅に歸せしめんとするものであり、（ロ）刺戟を除き御機嫌を取る事に依つて列國がスチムソン主義を拋棄するものであり、或は軍事的重壓を一擲するものであるかの如くに考へるものである。

かゝる謬想の由つて來る所は、第一東亞新事態の國際政治的必然性、第二その國際政局に於ける創造的意義を認め得ない所に在り、即ちそれは、その根柢に在る發展日本の必然的動向とその新建設方向とを覺り得ないか、或は意識的にかゝる方向への進行を回避せんとする所に在るのである。

第一に、東亞新事態の發生は、歐米者流が想像する如き片々たる二三軍人の作爲的工作如きに依つて揑つち上げられたものではなく、その成るの時に至つて成つた、即ち國際政局の回轉に依つて生じた自然進化的現象に外ならないのである。されば かゝる現象は獨り東亞のみの專有に非ずして世界至る所に生起した事に依つてもその必然性が立證せられるのである。

最近の事例を見やう。

一昨年から昨年へかけて大いに爭つたボリヴィアとパラグワイとのチャコ爭奪戰はその一つである。ボ國は人口三百萬パ國は人口八十萬共に南米の一小國であるが、ボリヴィアはその民族的發展の爲めにチャコの果樹園地帶を取得し、併せて海國を得んとし、小國とは云へ同じく發展を冀ふパラグワィの武力的抗爭に會したのである。

一昨年七月に於ける墺國ナチスの墺國首相暗殺、同じく十月に於けるユーゴースラヴィ國王の暗殺の此の二事件は、同系の衝動が國内に爆發したものである。

反之、國内統制の强力を有するイタリーは、鬱屈を放出して二月からエチオピアへ遠征軍を派遣し、遂にエチオピアとは武力戰を、英佛露等とは武力戰以外の凡ゆる戰爭を戰ふに至つた。又獨逸は胸の透く樣な確信を以て再軍備を宣言した。獨、伊は共にヴエルサイユ規範の破棄を敢行し、舊國際法學的桎梏から脱却したのである。さうして民族發展の必然的動向が、狹量利己的な道德に呪縛され難いものであることを實地に立證したものである。

而して内に發したオウスタリーは强力な武斷的方法で一端は統制を執つたが、結局は大觀して獨逸との合邦の外に生きる道なしと見られ、ユーゴは亦益々國内不安を昂めてゐる。反之、外に發した獨逸は、いよ〳〵内的整備を充實し、本年一月に至つて果然、ゲツベルス宣傳相の名を以て舊植民地の返還を世界に要求した。即ち彼の希望は益々增大し好望となつて來たのである。同樣にエチオピアに進入した伊太利も、成功すれば國民生活の一開展が可能であると見られてゐる。然も之に對する外界の措置を見ると、獨逸に對しては、英佛等の諸國が以て金科玉條としてゐたヴエルサイユ條約の破棄彼等の據つて以て立つて居た繩矩を無視せられたにも拘らず、結局之を認諾し寧ろ却て御機嫌を取らんとする風さへ見え伊國に對しては、英國の如きその陸海空軍の威力を示しつゝ聯盟諸國を動員して袋叩き的壓迫を加へてゐる。

即ち、吾々は是等の諸事實から次のことを知るのである。

（一）かゝる國民的衝動は不可避なる歷史の流れであること

（二）之を阻止することの不合理であること

（三）外界の列國が衝動國の强力なる時は結局自然默認を爲し、然らざれば斷然强壓を加へるものであること

蓋し前記の諸事件は樣々な形式を採つては居るが、歸する所は、國民生活が一の飽和狀態、又は最低限界に達したが爲めに炸發したものであり、從つて單なる一時的の生理的異常ではなく、生理的の自然的常勢であることが明かである。然も、正直に過去の規範に緊縛されて之を内に抑へたものは依然として何等の光明を認めず、之に介意せずして外に發出せしめたものは多かれ少かれ回生の希望を求め得て居る。從つて若し獨逸にしても、伊太利にしても、假りに總がゝりで之を彈壓したなら、必ずやそれは强烈な反抗を受けるか、然らざれば二國をして國内の同胞相殺戮するの凄慘なる事態を强要するに至るであらうことが想察される。是れは、かゝる動向を抑壓するの如何に不合理、人として如何に天理に悖るものであるかを知るものである。

然も之に對する列强の措置應對如何。

佛國は伊國に對しては寛大ならんとし、獨逸に對しては不法の狼藉者として斷罪せんとした。英國は反對に獨逸に對しては極めて寛大に、伊國に對しては世界の秩序破壞者として判決し、然も實力的反省手段を現に採りつゝある。而してその英佛は互ひに苟合し、或ひは、斷罪なり判決なりとは全く背馳した意味を爲さぬ妥協策を以て、獨、伊二國を懷柔せんとしてゐる。その動機は自國の小利以外に何ものもない。さうして一の暴に對して別個の暴を以て緩和しやうと云ふので

ある。

如何とならば、伊國はエチオピアを領有しやうとする。エチオピアは國民的威信と國民的生存との爲めに之を拒否した然るに英佛二國は、簡單に言へば、エチオピアの半分を伊太利に與へて妥協せしめやうとしたのである。之は第一何等の解決でなく、第二英伊は抑々何等の權利があつてエチオピアの分割讓渡をエチオピアに强ゆるのか。是れ畢竟自領の分割を惜しみ、伊國の軍事行動が變形して自領壓迫民族の反英的暴動に轉化すべきことを恐れたが爲めに外ならない。

更に伊獨兩國は、明かに現在の機制秩序を破壞する今回の行動を權利なりと主張してゐる。

吾々は玆で更に新なる學ぶべきものを見るのである。それは即ち、歐米に於ける是等の歷史的必然の動きには、何等創造的意義のないこと、從つてそれ故にそこに如何なる調整の方法もあり得ないことの二點である。蓋し彼等の歷史的運動は詮る所、利己と競爭の衝動以外に何等歷史的發見がない。利己と競爭との自由主義世界へ、再び利己と競爭との新なる動搖を波立たせるに過ぎないものであり、かゝる行動が何等問題を解決する所以に非ざることを感得して居ないからである。

吾々は玆に於て、重ねて次の四點を指摘する

第一、近時に於ける民族の發展乃至は甦生を基調とする國際的動搖並にそれに依つて齎らされる國際地位の變動は不可避なる歷史的必然である。

第二、之を內に抑へることは不合理である。

第三、その民族の合理的發展の爲めには自由主義の世界である限り强大なる彈力が須要不可缺である。

第四、是等の動搖並に之に伴ふ不安を解決鎭消せんが爲めには、新なる創造的指導原理が必要である。

三　發展日本の必然的動向

滿洲事變を契機として發動し、現に動きつゝある東亞の新事態も亦、上記歐米諸洲に於ける動搖と、同じく歷史の流れに掉さし、國際政局回轉の自然的形象として生動しつゝあるものなる點に於て、同一範疇に入るべきものである。

唯玆で、國民の正義觀を曇らせる暗影を拂ひ、一路邁往すべき勇斷を促す爲め、明確にして置かなければならぬ一事のある事である。それは西歐思想眩惑者流が、滿洲事變に對して、『發展日本が滿洲を武力奪取したのは當然である。蓋しそれは日本の已むに已まれぬ國民的要求だからである』、とする歐米諸國の巧妙なる誘導訊問に引つかゝつて、我意を得たりと云ふ樣な譖意を表してゐる事實である。即ち此の片言の意味する所は、(イ)條約違反、(ロ)武力侵略、(ハ)即ち弱肉强食の三つの點を立證せんとするに在つたのである。

然るに滿洲事變が、發展日本の對外的發動の姿であつたことは後記の如く事實であるが、而も、そこに至る迄には、さうして、現在の滿洲國獨立に至る迄には次の事實の在つた事を看過してはならない。

(一)　條約違反は支那が先きであつた。日本の發展は必至であつた、それ故在滿利權の活用、紙上利權に過ぎなかつたものを現實化せんとした。然るに支那は日本外交の紳士的態度に附け込んで、女子供に暴力を加へる底の卑劣なる手段を弄して日本權益の事實的運營を妨げ次第にその暴力行動を組織化し武力化した。之れ明かに條約違反である。日本が不法に慾張つた上での武力行動ではなかつた。

（二）武力行動の擴大は、支那が英米の尻押しを稍に最初の非違を謝らず、どこまでも抵抗した當然の結果で、日本が勝つたからに外ならない。

（三）事變の前に多年の自省と自重とがあつた。然も弱肉强食に非ざる外交事例は今日までの外交史に一もないのである。

事變直前、九千四百萬の大人口を擁する日本は正に自律經濟の飽和點に達して居た。

大戰景氣の頂上に登り詰めて大正九年の恐慌で顚落した日本經濟は、大正十二年の大震災、昭和二年の大恐慌、四年以後の世界恐慌の爲めに兇惡な形相を呈して來た。事業會社の減配は其數と率とを增加し、株式及び重要商品市場は續落の一路を辿り、一般物價を止度なく低落し、貿易も激減して行つた。中小企業の自然整理が行はれ、資本の偏在集中、大資本の肥大、金融資本の擡頭が顯著となつた。是が爲め、失業者の增大、農民の窘窮、購買力の減退が甚しく、益々恐慌を深化し、之と共に社會不安は凡ゆる方面に尖銳化し、資本制、自由主義體系全體への不信が表明せられ、かくして國家機構の根蔕を動搖したのである。

內部には政府の生溫い補修政策を無視して强烈な改造運動が非常な勢ひで潛行して居た。三・一五、四・一六兩事件は極左革命運動がかなり進行して居た事を立證した。同時に之と對抗する右派の國民主義的改革運動も同樣な速度で擴大しつゝあつた。五・一五事件が卒然として觸發したものでなかつたことはその證左である。而して最も重大な事實は、中產以下の階級が悉く、濃度に於て千差萬別であつたといふだけで、孰れかの改革運動に期待を持つて居たことであつた。

同樣の國民的批判が對外政策にも向けられて居た。昭和五年頃から表面化し、事變直前頃著るしく昂揚せられて來た生命線の主張はその綜合的な現はれであつた。即ちそれは、飽和狀態の日本經濟を外に向つて打開せんとし、先づ差當りの可能なる方法として、滿洲支那に有する既得權益に眼を向けたのである。

然るに、滿鐵を中心とする滿洲の諸權益は、却て次第に萎縮退嬰する傾向に在り、そのまゝにして推移せば全く立枯れとなるの外はない現狀に在つた。

而して此の現狀を誘導した直接の近因は、支那の革命外交即ち、支那國民主義の對外的動きが一切の在支外國權益の破棄に進み、日本諸權益に對して陰微卑屈なる女性的實行手段を執り、之に對する日本の平和外交が之れに屈服したことに在ることが明かとなつたのである。

斯くして支那の所謂非合法革命外交に對し、我國の國運の打開を托する强力外交が現實に動き、玆に、支那の國民的興潮と日本の國民的膨脹とが滿洲なる邊境地帶に於て爆發したのであつて、此の意味に於て、滿洲を爭つた日本と支那の躍動角逐は、前記歐米諸國のそれと一系を爲すものであると共に、そのトップを切つたものである。

それ故に、若し依然として無意義な紳士外交が引續き支那のヂリ押し壓迫に屈して居たなら、日本の國民的躍動は必ずや左右何れかの急進的革新運動に依つて同胞相殺戮する鬪爭の修羅道に墮ちてゐたであらう。

何故ならば當時の國內狀勢は曩に一言した如く極度の不況に沈淪し、一方に於て倒產者失業者が續出し、他方には資本の私人的偏在集中が高度に昂まり、從つて少數の巨大資本團の產業獨占の傾向が急速となり、又一方に於て極端なる生產過剩が起る他方に於て、庶民の物資不足、特に食料品其他の必需品缺乏が之と併存し、それは殊に農民に於て甚しく、自由主義的自律經濟の典型的弱點を暴露して來た。而も政府は金融資本の救濟の爲めには、震災及び昭和二年の恐慌に依つ

て危機に瀕した際、或は數億の公債を發行し、或は日銀の救濟に對して數億の補償をしたのであるが、暗澹たる農民の悲境並に倒産者失業者に對しては何等徹底的の救濟を講ぜず、此の社會不安を救急する何等の適切なる對策を有たなかつたからである。

かくの如くして不可避であつた滿洲事變は、一方に於て滿洲國の成立、日滿同盟の結成、その東亞全局への發展的動向並に日本經濟の顯著なる躍進を、他方に於て列强の當然にして執拗なる原狀還元乃至は發展阻遏の作用を結果したのである。而して其處にこそ日本の新建設的方向があるのである。

四　日本の新建設的方向

滿洲國の成立はアジアの諸民族に一大衝動を與へ、次で日滿兩國間に完全なる同盟が締結されるや、彼等は一時その衝動が裏切られたのではないかの疑惑を抱いたが、更に其後に於ける滿洲の獨立國家としての發展、之に對する日本の全く純粹なる共存共榮的支援を見るに迨んで、疑惑は一掃せられたかの感があつた。

第一に衝動を與へたのは大體黃河以北の所謂北支である。

北支は政治的には支那の中央政府と認められる南京政權と、滿洲を本據としてゐた學良政權との中間に介在する一種の緩衝地帶でもあり又爭奪の地でもあつたのであるが、滿洲國の成立に依つて、一時學良の最後の地盤として僅かに北方的色彩を止めてゐたのを最後として、間もなく蔣政權の手に奪はれて了つた。北平に設けられた政務整理委員會並に軍事分會といふものがその代表代行の機關であつた。

而して之と共に北支に派遣せられた支那のゲ・ペ・ウである所の憲兵團及び藍衣社並に國民黨の市黨部は、孤壘を守る學良派と河北を爭つてゐた。その結果昭和十年五月の北支事件を機として學良派は掃蕩せられ、馮玉祥系の宋哲元等が實力者として殘ることゝなつた。

此の事實は何を語るかといふに、一言以て蔽へば北支を爭つて居た學良と蔣の兩勢力が共に消失して、謂はば北支に土着してゐた馮系並に山西の閻錫山系、換言すれば北支人の實力者が殘つたと云ふことになる。もう一度言ひ換へれば、常に完全に統一せられた歷史のない尨大な支那は、常に幾個かの獨立政權が地理的に自然分界を有する幾個かの地方を支配すると云ふ自然の歸趨を取つたに過ぎないのである。

然るにその北支那は蔣介石が一度は所謂北伐に依つて之をその政治的支配下に收めたのであるにも拘らず、事變前に於ける形勢は、著るしく滿洲に密邇してゐたのである。即ち北支那は南京政權の威力にも拘らず南支那から次第に離れ滿洲に同化しつゝあつたのである。さうしてそれは主として經濟的並に民族的關係の然らしめたものである。

民族關係に就て見るに、滿洲國民を構成する三千萬民中の大部分は漢人種であるが、その又一大部分は殆んど北支人、特に河北、山東兩省出身の者であつた。是等の北支人は、孰れも學良の故父張作霖が日本武力の支援に依つて滿洲を統一し、治安を維持し、滿鐵を中心とする日本の經濟開發に依つて繁榮した結果、年々五十萬乃至時には百萬の移民となつて渡り、半ば歸鄉し半ば土着したものである。それ故滿洲と北支とは民族的には不可分となつて來て居たのである。

この移民關係は、從つて經濟的にも當然滿洲と北支との近接を促した。移民の送金は北支經濟の重要なる一要素となり貿易關係も北支滿洲間の割合が次第に增大し、之と同時に北支貿易が日本との割合を增加し、南支との割合を減ずる顯著

な傾向を示して來てゐた。

かゝる所へ、滿洲國の獨立、日滿經濟ブロックが成立した爲めに、北支と滿洲との關係は種々なる事實上の不便を生じ國を異にする爲めの法律的制約も受けることゝなつた。然も一時は南京政府の抗日滿指令に依つて經濟絶交的態度を執つては見たが、それは前記の如き關係から北支を著るしい窮地へ陷入れた。他方に於て、滿洲の發展、政權者の非搾取、樂土建設への確實なる歩み等が、眼から耳から傳へられた。

かくして自然の數として、北支には事變前の滿洲との不可分的傾向を強化せんとする强い動向が發生したのである。

されば滿洲國が成立した以上、而して日滿ブロックを形成した以上、日本は此の基礎的事態を確認して、その必然的動向を育成しなければならないのは當然過ることであり、かくして新なる東亞の安定が可能となるのである。そこに新なる日本の建設的動向がある譯である。昨秋來の北支獨立問題の如きも、此の觀點に於て正しく判斷しなければならぬ。

第二に衝動を與へたのは暹羅である。

暹羅が國際聯盟最後の總會に於て、『棄權』に依つて日本斷罪に參加せず、その結果四十二對一となつたことは周知の事實である。

暹羅は、今日まで殆んど英國の屬國であつたと言つてもよい狀態であつて、全く英國の搾取下にあつたのである。然るにその暹羅が棄權したと云ふことは、彼が滿洲國の成立に依つて如何に大きな感激的衝動を受けたかを物語るものである。その一つは西歐白人の包圍攻擊に敢然起つて屈しなかつた日本の力量、アジア人の興起に對する同じアジア人としての琴線相觸れる同感、滿洲の略取に非ざる友好的獨立建設であり、他は即ち彼が西歐先進國の羈絆から擺脱し得ることの希望であつた。

然して暹羅その後の行動を見よ。

廣大なる棉花の栽培權を日本に許與した。深軍軍令部長其他の海軍士官を、英國に非ざる日本へ見學並に航海術習得の爲めに來訪せしめた。軍艦の注文を我國に發した。內務大臣を視察並に交驩の爲め日本へ派遣した。而して本年初め、從來英國の獨占であつた鐵道建設權を日本へ許與した。

イランも同樣の傾向に在ると云へる。

滿洲國が成立した際、イラン政府は逸早く同國承認を申出た。不幸にして幣原外相に依つて無用の業として却て拒否せられて沙汰止みとなつたが、之又本年初め、日本へ鐵道技師の派遣を要請して來た。

英國がシンガポール軍港の擴大强化を急施し、香港防備を擴築し、和蘭が英國と對日軍事同盟を締結し、瓜哇軍港の建設を決定した如き、その一半は支那へ進展する爲めの據點を强化するに在るとは云へ、他の一半はビルマ、マレイ、ボルネオ、瓜哇、スマトラ等のアジア領土に、滿洲國成立を基點とする一連の動きが與へたる衝動の反映であるのである。

是等の諸領土の民族が、今日英國和蘭等の資本主義の犧牲となつて、例へば、英國和蘭等の資本主義擁護の爲めの保護貿易政策に依つて、日本の安い良い品を手にすることを得ず、窮迫せる生活に喘ぎ乍ら本國の高い物を强制的に買はされてゐる。此の方式は凡ての政策に共通のものである爲め、是等の諸民族は屢々甲斐なき反抗暴動を繰返へして居るといふことである。彼等の此の悲愴なる反抗を飜譯すれば、樂土としての理想滿洲國への憧れである。

東亞の福祉的安定が、所謂新事態を認め、之を擴充する新建設的方向に進むことにのみ存するものであることは明かで

あると共に、列強の否認、還元が由て來る所、而してそれが重壓として我々の頭上に掩被し來ることの所以が明かである。

然るに吾々の建設方向には、かゝる小乘的理由の外に、更に大乘的創造的意義を有つのである。

五　新事態の創造的意義

東亞の新事態に於ける大乘的意義は、滿洲國の建國方針に具現されてゐる。

滿洲國草創の主權者執政の宣言を見やう。

『人類は必ず道德を重んぜよ。然るを種族の見有れば。即ち人を抑へ己を揚ぐ。而して道德薄まる矣。人類は必ず仁愛を重んぜよ。然るを國際の爭有れば、即ち人を損し己を利す。而して仁愛薄まる矣。今吾國を立つ。道德・仁愛を以て主と爲し、種族の見、國際の爭を除去せむ。王道樂土・當に諸の事實を見るべし。』云々

又建國宣言には次の如く言つてゐる。

『竊に惟ふに政は道に本づき、道は天に本づく。我國家建設の旨は一に以て順天安民を主と爲す。』

又曰く、

『王道主義を實行し必ず境內一切の民族をして熙熙皡皡として春臺に登るが如くならしめ、東亞永久の光榮を保ちて世界政治の模型と爲さむ。』

即ち王道主義の國政は、對內國策としては

『四民蘇生して安息を得ば政即ち成らむ、』

との順天安民であり、對外國策としては

『排外政策を持せず、玆に國際戰爭を戢め、更に門戶開放、機會均等主義を以て世界の民族と共に共存共榮せむ』

とする萬邦協和の大道を往かんとするもので、『忠信篤敬ならば蠻貌の邦と雖も行はるべし』の誠道と、『……東亞の光となり、全世界を光被し、全人類間に眞誠の大調和を齎らすべき瑞兆なり。此處大乘相應の地に史上未だ見ざる理想境を創建すべく全努力を傾くるは、即ち興亞の大濤となりて人種的偏見を是正し、中外に悖らざる世界正義の確立を目指す』『不退轉の意氣とを有つものである。

約言すれば、此の人類世界から、利己と競爭と排他と不信と憎惡とを芟除し、和と信との一體境を顯現しやうと言ふのである。

洵に大いなる夢である。

然り夢である。吾等の現實世界は、今餘りにも夢を藐視してゐる。夢なくして何の大理想があらうか。大理想なくして何の打開があらうか。

然らば夢とは何か？夢の至境、それは無何有之鄕であり、無爲である。

無何有事鄕は造化自然至道の樂土であり、無爲は君王の德化に依り天下自然に治まるの政治的極致である。

吾等は玆に轉換世界の決定的方向に對する暗示を見る。蓋し、無爲の境地に於ける基本的法則は信と和とであり、謂ふ所の王道樂土は則ち信と和との一體境だからであり、吾等の現實の自由主義世界がその終末的破綻に直面し、然も解案の索出に窮してゐるからである。

自由主義の鼻祖アダム・スミスには尙夢があつた。彼は、個人をして思ふまゝなる活動を爲さしむれば、社會は自らなる調和體を顯現するであらうと言つた。然るにその改善に改善を加へて來た體系は調和體に非ずして、凡ゆる意味での社會の構成部分間に分裂と抗爭とを齎らした。此の結果を一言にして竭せば、和と信とを全く失念したのである。恐らくは無自覺であつた原始共產社會の和信一體境を、自覺せる高度の文化的和信一體境に嚮導すべきであつた世界史の一大誤謬であつた。

されば早くも競爭主義の社會的不安に氣附き、原始共產を回想して夢を描いたオウエス、サンシモン、フーリエーの着眼は正しかつた。而して是が三人の夢があつたればこそ、マルクスの『科學的夢』が產れ、クロプトキンの相互扶助の理念が在り得たのであり、マルクスの夢が、レーニン、スターリンの一大轉向を創り出したのである。

然し乍ら蘇聯の轉向は、自由主義體系の修正として、自然科學的には一の成功を收めたものであるが、依然たる白人文化の分析思想を基礎としたが爲めに、和と信との全體的構成に於て誤謬に陷つてゐる。

かくして玆に王道の原理があり、之と相通無縫、圖融一境、神の心を以て彼を扶け、彼と共に在らんとする我が皇道があるのである。

皇道とは、信六極に布き、和八紘に洽ねき大和一體の境地顯現であり、利己と鬪爭の自由主義世界を、和と信との基本法則を以て、擧國和親、萬邦協和、皇族共榮の道義世界に再建せんとするものである。

之こそ、我が擧國の理想であり、我獨り世界に於かんとする道義的使命であり、而して轉換世界の渦中に赫耀たる光輝を示現すべき東亞新事態の創造的意義である。單に、一の競爭國家を以て他の競爭國家に代へるのでは、世界史に一新紀元を劃する重大事件、國際時局の基石とは云へない。

されば、我國が聯盟を脫退するに際し渙發せられたる大詔に、

『方今列國ハ稀有ノ世變ニ際會シ帝國亦非常ノ時艱ニ遭遇ス

『今次滿洲國ノ新興ニ當リ帝國ハ其ノ獨立ヲ尊重シ健全ナル發達ヲ促スヲ以テ東亞ノ禍根ヲ除キ世界ノ平和ヲ保ツノ基ナリト爲ス

『愈々信ヲ國際ニ篤クシ大義ヲ宇內ニ顯揚スルハ夙夜朕カ念トスル所ナリ

と宣はせられ、齋藤總理大臣の全國民に對する告諭に於て、

『帝國亦其（世界不安）圈外に超然たる能はず。加之東亞の複雜なる政局に直面して滿洲國の建設事業完成に協力し、更に進みて日滿支三國和協の基を開き、極東の康寧を確立するの重責を荷ふ。

『……又敢て東洋に蹈躇して偏安を事とするものに非ず、益々友邦の誼を敦くし正義公道を世界に宣布せむことを期するや固より言を俟たず。

と言つてゐるのである。

今時、世界不安益々甚だしく、轉換の要愈々切なるものがあり、之と共に、右の責務を遂行するの困難更に重疊し來るかの觀があり、更に緊褌一番すべきの秋である。

然らば、轉換期とは何か、之に對處すべき斷案如何。

第三　創造的國策の基調

一　自由主義の弊瀆

文化は有閑階級が作る、とヴェブレンが言つた。

是は有閑階級の存在を肯定する實證としては大して役に立たないが、今日の發展日本の背後、即ち經濟的、科學的發展の部面は措いて、之と形影相伴ふ觀のある他の愉樂的一面を見るとき、多分の眞理のあることを認めざるを得ない。

カフエー、バー、喫茶店の繁昌、ダンスホール、流行小唄、ジヤズの流行、映畫、スポーツの大入り等々、是等の現象は畢竟之を需要する閑暇の階級の存在が、異常なる發展を爲さしめたと言へる。勿論孰れの時代にも、愉樂的一面は必ず社會に存在し、新しい愉樂に眼を奪はれ、或は守舊派の人々がそれを非難するといふ場面はあつた。三味線音樂が流行し始めた時に太宰春臺が之を淫樂なりとして嗟嘆痛擊した如きはその一例である。

だから愉樂そのものゝ興隆を云々するのではないが、その流行の內容には甚だ寒心すべきものが多いことを見逃せない。

何となれば、第一に是等需要階級の一大部分が青年男女學生であり、他の一大部分が最も有爲なる青年社會人階級であること、第二は是等の次時代階級の需要程度は慰安程度は素より、娯樂を起えて享樂の域に入つてゐること、第三は是等の青年群の對社會態度は全く思ひ上つて居り、傍若無人であり、德義と禮節とを缺くこと最も甚しく、第四にその生理的

狀態は、文化とは凡そ緣の遠い性慾の露骨な街學的炫燿、ボクシングの殺人淫樂性乃至はリンチ性、或はシカゴ・ギヤングの食人種性などが、最も愉しい好刺戟として迎へられると云ふ神經衰弱的若くは變質的症狀に在ること、而して第五にその根本的な物の見方考へ方が全く利己的排他的であることが、著るしい特徵だからである。換言すれば、その狀勢は自己陶醉か自我地獄であり、社會性の著るしい褪色である。玆では非常時は、大きな夢と共に獏に喰はれて了つてゐる。

青年群のかゝる心理狀態は明かに不健全な狀態である。而して此の不健全な狀態は決して青年日本人の本質的狀態ではなく、環境に同化され易い青年心理が引摺り込まれた安易な逃避的境涯なのである。さうしてかゝる環境が即ち自由主義の爛熟である。

即ち自由主義體系の指導原理たる個人主義とその經濟機制に於ける利潤搾取が、日本資本主義の進展と共に極度に抽象化され、理想化され、同時に常識化され、必然化され、さうして感覺化された所に一切の禍根があるのである。

加ふるに近代日本の青年男女は、日本人特有の早い順應性、吸收力、同化力に於ても素晴らしく高速度である結果、凡ゆる西歐文化の既に原則化された特質を感受して常識化することが速い。然るに近代西歐文化は、自由主義、資本主義機構內部の爛熟と共に、勢ひ末期的頽廢症狀の方がその特長よりも顯著に現はれてゐる。さうしてそれは、それ故にこそ根本的な革新が必要とされる程度に至つてゐるのであるが、その結果、シネマを筆頭とする西歐文化の凡ゆる媒介を通じて急速豐富に吸收されるものは、弊害的一面の方が多いと云ふ當然の事由もある。

然し乍ら、青年の利潤觀を反社會的ならしめる爲めに更に拍車をかけてゐるのは、人の能力、技術、天分等を一切の勞働力同樣利潤搾取の對象とする現實の經濟社會の機械的作用（資本の意志的操作も加へたる）に外ならない。それ故青年

の心理を反社會的ならしめるものは一に、青年の希望、向上心、理想を初めつから諦めさせて、彼等を驅つて逃避的な不健全狀態へ追ひ込む經濟制度に在ると言へる。

此の事は、故に、獨り青年、此處に擧げた都市青年に限つたことではない。凡ゆる年齡、凡ゆる階級に食ひ入つてゐる。政治に於ても同樣である。政黨の凋落無力化は即ち此處に根本的原因があり、それ故に、總選擧をやつた所で、結局現在と大差のない人々が、大差のない政治意識で再現されるだらうと言はれる所以であり、結局は最後の五六千票を左右する五千圓か一萬圓かの問題であるとされる理由である。而してそれは是れ迄の社會の基礎を爲す經濟制度に、一々、その指導原理である利潤觀に胚胎すると云へるのである。

二　利潤觀の自家撞着

自由主義經濟の根本原理は謂ふ迄もなく、『より多くの利潤』の追求である。利潤とは價値交換の差額、交換差である。それを媒介するものが商品であり、利子を生む金融資本は一種の商品と見ることが出來る。即ち此の經濟に於ては『より大なる利潤』が此の經濟を動かす原動力となり、利潤卽交換差を繞つて回轉することゝなり、勢ひ商品の第二義的な交換價値が第一義的な使用價値を制壓する。

此の原理を支持する人々は、此の交換差の大量取得を眼指して人は全能力を擧げて經濟活動をすることになるから、大いに進歩發達する。然も、人の不要なものを生産すれば當然交換差が得られなくなるから、そこで需要と供給の關係が適當に調節して、自律的に生産から消費までの全過程を圓滑ならしめると云つた。

成程、五人か十人で互に分業をしたのならその通りであつたかも知れないが、人の數が數千萬から數億になり更に十數億になり、地域も一國から數國、一地方から數地方、さうして現在の全世界六十ケ國ばかりに擴大し、更に文化の進展と共に、商品の種目が無數に殖え、機構も複雜となり、經濟活動の過程も頗る多岐となり、其間に利潤追求の競爭が、樣々な段階の小社會間の及び個人間の衝突と衝突のための協力とを産み出し、理想通りに自律調整する事が出來ないことゝなつた。

此の經濟に於ては、交換差をより大にすることが唯一の目標であるから、その爲めに、

第一、生産部面に於けるコスト切下げの烈しい競爭と、分配部面に於ける市場支配權の競爭が起り、

第二、その結果として、富の二重偏在が起る。一は交換差の等差から生ずるもので、他は勞働力及び技術の搾取と云ふコスト切下げの過程から生ずるものである。

此の場合の理想は獨占であること言ふ迄もない。原料の獨占、勞働力、技術の獨占、市場の獨占、此の三者を兼併することが最上であり、その爲めに資本の獨占が起る。資本の獨占の爲め、交換差の差等增大の競爭が起り、コスト切下げの過程に於て、切下げる者と切下げられるものとの激しい利害の衝突、即ち謂ふ所の勞資問題、及び切下げる側に於ける相互扶助乃至は協同が起る。トラスト、カルテル、商工會議所、經濟聯盟等々、而して此の資本獨占の理想的境地に達したものが三井と三菱である。三井か三菱に頭を下げなければ利潤活動が出來ない。どんなに社會的な、國家的な妙案も、此の手を經なければ經濟活動を起すことが六ケ敷いといふのが今日の內部事情である。

かくして巨大資本の經濟部面支配力は、當然に政治を支配し、思想を作り上げて社會を統制することゝなつた。而して

それは唯一つの原動力利潤である。

茲で二つの問題が起る。

第一は社會的、國家的な不都合の問題である。

著るしい工業躍進の反面に、國民の半數即ち約五千萬人の農民が窘窮の底にあることはその一である。農民がどうしても浮び上れない仕組みになつてゐることは農民が最も良く知つてゐる。數百萬人の失業者が、最も不生産的な生活をしてゐる一方に於て、十時間からそれ以上の長時間働いてゐるものもある。さうしてそれ等の二三時間を徒食者に割當ることの出來ない組織になつてゐる。

國民の一部に必需品が不足してゐるのに、娯樂品贅澤品が他方に溢れてゐることはその二である。換言すれば生産が偏つてゐるのである。之を反面から見れば、購買力の偏倚である。何故都市に在る青年男女が飽食暖衣、ラグビーから喫茶店から映畫へと歩いてゐる時に、飢饉の東北農民は木の根や土を啖ひ、滿洲へ息子を送り、玉の井へ娘を賣らなければならないのか。

何故滿洲の石炭を內地へ持つて來て普及させては不可ないのか。日本內地で出來るにも拘らず、年々アメリカから莫大な自動車を輸入してゐる。ゴムや石油や石油の如く內地にも滿洲にもないものならば仕方がないが、內地に豐富に在り乍ら生産をしないでゐるものがある。約言すれば意識的な生産制限が現實に存在してゐる。これその三である。

いざ戰爭となつてゴムや石油など日本に原料のない物に對して、人造ゴムとか石炭液化とか云ふ研究が、つい此頃こそ弗々聞かれるやうになつたが、一向華々しい又眞摯な研究が行はれなかつた。蘇聯では既にゴム人造に成功したといふの

に、日本には碌な研究所も出來てゐない。目前その必要が迫つてゐても採算が取れなければ資本は出動しない。これその四であり、最初滿洲國へ容易に資本が乘り出さなかつたのも謂はゞその爲めであつた。

更に、曩に記した樣な國際非常情勢に對して、國際當面の責任者が不安なき國防の爲めの豫算を要求しても之に應ずることが出來ない、といふが如きことはその五である。自給自足可能であり、國內に無限の『富』を有する米國の如きなら知らず、何國と雖も法外なる兵備充實は不可能であらう。然し乍ら、隣邦蘇邦の如きは庶民極度の貧窮に在つて尙彼の驚嘆すべき大軍備、科學的業績、研究、試みが可能である。日本にそれが不可能でないことは、社會狀勢、經濟狀勢——神經衰弱者の神經の如く過敏な『金融神經』軍部の國防神經よりも一層敏感である神經すらもが、殆んど非常時的樣相を示してゐないのを見ても諒解される。

國際的に之を見れば一層明瞭である。例へば、日本の安價良品が購買使用を禁ぜられ、高價粗品が强制的に購買使用されなければならない所があり、日本の移民が入國を拒否される事實があり、世界の人類の土地に領土と稱する嚴しい分界が劃せられて居て、其狀は恰も或る所では四疊半に親子五人寢ね、或る所では夫婦ぎりで十數室の宏壯なる邸宅を構へると一斑である。

而もかゝる社會的不合理は次に述べる樣に、免れ得ないものである。即ち此の事實が、一方に於て極端なる利潤觀、總てのものを利潤の見地から見る損德觀、營利觀を發達せしめ、他方に於て逃避的な或は反逆的な思想を作り出したのである。

三　歴史轉換の方向

かゝる社會的不合理は、之を約言すれば、非自律的であり、不融通的であり、絶對的不生産的であり、機構の凝結停滯であると云へる。その凝結狀態は分裂的であり、利己的であり、第二義的であり、抽象的である。換言すれば、經濟本來の目的たる使用價値の生産が、之を促進する爲めの手段たる第二義的な交換價値生産に轉化し、之を支持强化する方向に一路驀進して來た結果、その爲めの微妙な機械作用に縛り上げられて身動きがならなくなつたのである。更に別言すれば、人間、政治、教育、自然科學等一切のものゝ奴隷化である。さうしてその主人は、言ふ迄もなく『利潤の機械作用』である。

茲に第二の問題がある。即ちそれは、機械作用の自家撞着であり、自由主義原理の解體狀勢である。

人の共同生活體は自然發生的卽ち無意識に構成されたるものであるかも知れない。然し乍ら人は夙くより、共同生活體構成の意義を、之が全構成員をして有無相通ぜしめ、全構成員を同時に至幸至福ならしむべきもの即ち眞の意味の共存共榮であるとの觀念を抱き、優勝劣敗の現實を共通福祉の理想に向上せしむべきことを肯定して來た。自由競爭を原則とする資本主義經濟の初期に於ても、此の理想が前提となつてゐた。

果して然らば、富、購買力の偏倚、勞働力の過剩偏在生産の偏傾、公共福祉的要求を充足し得ないこと、絶對不可缺なる生産又は研究の不可能等の反社會性は明かに矛盾の第一である。蓋し社會性に順應せしめやうとすれば、生産の縮少が起り、或は機構の解體を必然ならしめる。

人間の奴隷化、利用すべき自然科學が、その驚異的發達に依つて機構の機械化を高度にし、その爲め自然科學が逆に人間を驅使するに至つたことはその第二である。それは自然科學が資本、利潤と結び附いた結果に外ならない。

利潤の高度化の爲めの意識的生産制限、利潤を資本化する爲めの購買力減少に依る生産の萎縮、生産力の相對的過剩等は、その第三である。

而して最後の決定的な矛盾は、それ自身の機構を最高度化することが、それ自身の機構を否定するものであるといふ事實である。例へば自由主義陣營に於て、昨今に於ける日本産業發展の原因が、日本の特殊事情を除いた、即ち自由主義經濟に共通の原因として、企業の整理淘汰統制合理化が擧げられ、貿易の躍進に就ても同樣、共通的原因として、『近代資本主義の經濟機構が不況の過程を經る毎に獨占的の傾向を强め、各産業分野に於て統制の强化を見た』ことであると指摘せられてゐる。

換言すれば不況即ち矛盾に直面して修正されて來たのである。而して獨占强化の極限はその單一的である。詮り自由競爭の廢絶である。個人觀的自由活動の代りに全體觀の統制が置換へられなければならないのである。利潤觀の齎らす跛行狀勢を修正して平分均齊を取らなければならない方向に動いてゐるのである。即ちその極限に於ける利潤は、最早個人觀的な利潤ではなくして、全體觀的な社會收益であり、國家收益である譯である。

之を要するに、自由主義經濟は現にその自然必然的高度化の結果、之とは全く對極の、一個の單一統制經濟に入らんとしてゐるのである。然も、衣食住の一小斷片、吾々個人の一擧手一投足と雖も、圓球上剩す所なく行き亘つた世界經濟の有機的相關作用を免れないと云ふ、統一極點が世界であることを指示してゐるのである。

斯くして、幾多上述の禍害を貽しつゝ、歴史一大轉換の方向を指示し、且つその溫床となつたことは資本主義經濟の大いなる歴史的役割であつた。彼は今やその役割を果したと云ふべきである。然らば今日は、此の過去の機構の禍害を一擧にして艾除し、無爲の境地への一大飛躍を遂ぐべきの秋であり、そこにこそ新なる歴史の第一頁を開くべき、轉換の意義がある。

洵に全人類が翻然心機一轉すべきの秋である。さうして茲に吾々の創造的國策の基調がある。

第四　强力國策の提唱

一　國策强化の必至

新なる歴史を創造することは人類に啓示せられたる天業であり、之が恢復に對し、世界が擧つて一大發奮することが、取も直さず非常時克服の爲めの唯一の通路であり、眞の平和を掩有する爲めの共通最大限である。

然らば此の角度に於ける世界の態勢如何。

不幸にして世界は未だ何等の確信に到達せず、徒らに歴史の奔流に身を任せつゝあるに過ぎないことを痛感せしめられる。

第一に、世界の識者の言論に就て見るに、之を略次の三樣に大別し得る。

（イ）轉換の方向を些か認識し、之に順應すべしと爲すもので、本年一月下旬、何等の曙光をも認めずして死去した米人國際評論家フランク・サイモンヅはその一人である。彼は現在の世界列强を滿足國と不滿足國とに大分し、滿足國が不滿足國に對し、自發的に、必須の資源を提供し、過剩人口の排け場を讓與するに非ざれば戰爭は絶滅し得ない。現在の如き經濟的不平等の上には組織的平和の存立は不可能であると說いた。而も米人たる彼は、米國が人口に比し過大なる資源と領土とを擅有しつゝ、自ら門戸を閉鎖し、加之他領にまで手を伸ばしてゐるのを論難してゐる。かゝる言說が眞に人類

を憶ふ無土の識者の同感を得てゐる事實はあるが、實際の國際政治には何等の行動となつても現はれてゐない。米國海軍長官の太平洋二分論の如きを以て、その一半の現はれであると爲すものもあるが、遽かに諒解し得ないものである。

（ロ）　有無相通の必要を認めつゝ、己れの過剰分に就ては口を拭はんとするものである。昨冬一時言論界を賑はした米人ハウス大佐等の殖民地再分割論は是れである。是れは既に强國間の妥協を企圖したものであつて、現に殖民地國として搾取せられつゝある被壓迫民族に對して何等の考慮を加へてない點に於て致命的な誤謬に陷つてゐる。次に彼等は再分割を口にしつゝ、何等その具體策を示さず、彼等自身の過剰部分に就ては省て他を言ふの態度を執つてゐる。是れは特に英國及び米國の二國に擧つた聲として、吾々はその正面解釋のみに據らず、些か眼光を紙背に徹すれば、彼等は日本にシベリア進出を暗示し、日蘇抗爭の激化を内に意圖してゐるに非ずやとも疑はれるのである。果して然りとすればかゝる二重の根本的過誤に陷つてゐる所言の實現を欲しない。

（ハ）　全く現狀に盲目にして、歴史の必然に抗し、自己の力を過信し、新興時潮を抑壓せんとするもので、言語道斷である。所謂滿足國英、米、佛、蘇の諸新聞紙に現はれる言論は概ね是れで、南阿のスマツツ將會の如きはその著名なる飛將である。彼は、日本の擡頭を以て新興方向の代表的事實と認め、之に依つてアジア諸邦に一大衝擊を與へ、延いて歐米の殖民地崩壞並にその本國たる英、米、佛、蘭、の滿足國の顚落を招徠するものであると爲し、英、米聯合の絶對優勢を以て日本を彈壓すべきことを公言力說してゐる。而も之が滿足國に於ける異常なる感激を購ひ、現實の政策に多大の影響を與へた事を看過し得ない。

第二に國際政治の實際方面に於ては、歴史適順が非常時克服の必須方策であるとの認識は國境に於て遮斷せられ、歩一度國境を越えれば、忽ち自我意識と變じて對立し、所謂滿足國と不滿足國との爭執を激化しつゝ、次第に之を他の新なる死鬪、即ち深刻なる人種戰に轉化せしめんとする形勢をさへ馴致しつゝある。

例へば國際聯盟は、崩壞過程を辿りつゝ百八十度の急轉回を明示した。世界平和の達成から既成勢力の擁護へ、が是れである。之は既成勢力が自らの擁護を世界平和ありと認めその原則に基く新秩序を以て國際體制を完成せんことを聯盟の目的と認めてゐたのであるから、轉向ではなくして本質を曝露したものであることは一點疑ひない所である。而も當初に於てはその一面に眞の世界平和を憶ふ眞劍なる意圖が無いではなかつたのである。然るに不滿足國の動搖、反抗に會し、聯盟が原則に於て誤つて居た事を覺知した今日、之に適順せしむることを知らず、露骨に全的に既成勢力の維持保衛の爲めに之を利用してゐるのは、明白なる轉向である。

民族自裁の名の下に封建的侵略併呑から解放されて獨立した東歐並に中歐の諸邦は自立的家々能力を附與されてゐなかつた爲めに、早くも一九二八年頃から自立自存の困難を愬へて、聯盟にその國際平和保持の爲めの支援を求めてゐた。然し、聯盟は英斷的方策を發見し得なかつた結果、是等の諸小邦は、事實上聯盟の恃むに足らざるを見て、彼等自らの間に相通の方途を期待し小聯盟を結成してゐた。東歐農業同盟の如きはその一例である。之は明かに聯盟原則の最初の破綻であつた。何故ならば、聯盟は此の機會に於て、眞の平和への方向を發見し、その方向へ舵輪を轉轉すべきであつたからである。

次で一大事件として日本の聯盟脱退が起り、亞いで昨年の伊エ紛爭が起つたのである。滿洲事變の根本原因が、東歐諸邦のそれと一連のものであることは當時既に明かに認められてゐたのである。而して伊エ紛爭も曩に特に指摘した樣に、

滿洲事變とはその發起のモーラルに於て著るしく異るとは云へ、根本の歴史的意義に於ては同一系の機轉に出でたものである。所が聯盟は抑壓の手段を執つたに過ぎなかつた。

之と同一の事象が聯盟と系列を同じくするヴエルサイユ條約の規範に對して發生した。十年三月十六日の獨逸の再軍備宣言が之れである。聯盟は獨逸問責案を決議し、佛國は英伊との間に對獨相互援助協定を成立せしめた。之れは明かに否認であるが、唯其の爲めに實力を發動せしめなかつた丈である。

かくの如くして、新興又は再興諸勢力と既成勢力との間に、現在の政治的、經濟的、軍事的勢力分野の調整再分割と之が否定拒否との抗爭が、大戰後の新事象として次第に激成されて行つた。獨逸は再軍備宣言の後、遂に本年初頭に於て殖民地の返還を要求する宣言を發した。伊太利は新なる殖民地を欲求し、それを行動に移した。此間に土耳古も海峽の再武裝を要求してゐる。一切は歐洲現秩序の規範たるヴエルサイユ條約の修正乃至は破棄の行動であり、現狀打破の運動である。蓋し彼等を現狀打破派と呼ぶ所以である。

獨逸は條約の抑壓を民力の再生が挑ね除けやうとする國家生存權の主張であり、伊太利は民族の自然發展が國境の制限を跳躍しやうとする國民生存權の主張であり、共に人類の生存權に對する人爲的境界を突破せんとするものである。然るに彼等は、畢竟歴史流向の本質を洞察し得ない結果として、一の境界を撤して他の境界を設けんとするに過ぎない何等の新發見なき、舊自由主義的範疇を出で得ない自我的國民主義を昂揚してゐるに過ぎない。他方之に對する既成勢力派は之亦、自らの非常時的苦境に懊惱する結果、その淵源を達見し得ず、國家境界の迷妄に固執して有無相通の大原則を失念し、彼等自身の自我的現狀維持を以て新興國民主義の自我的無法を非難してゐる。

久しく國民單位が全人類が支配して來たのである。而してその國民單位の桎梏が彼等を刺戟したのであるから、そこに大悟一番なき限り、國民單位の自我的擴大、その爲めの國家强化が、列强血眼の唯一策として推進されるのも亦已むを得ない事實である。

第二章に提示した國策强化必至の第一の然して列國共通の理由である。

然し乍ら吾々は玆に一層重大なる第二の、然して特殊の理由を有つのである。それは即ち人種展開の悽慘なる豫兆である。

耳にするだに戰慄を禁じ得ない人種戰は、普ねく人の廻避せんと欲する所であり、目前の平和を好む人々の得て笑殺し去らんとする所である。曾て十數年以前『有色人種の興潮』なる一書を著はして人種戰の到來を豫言した。米人ストツダード博士は、最近却て前說を翻へすが如き論文を發表してゐる。然し乍ら、同時に他方に於ては『血は水よりも濃き』ことを反覆强調して、アングロサクソンの團結、白人種の大同圖結を勸說慫慂してゐる論客も尠くない。前年におけるムツソリーニの日支同盟論はその一である。

然し乍ら吾々はかくの如き閭巷途說に類する不確實なる現象を捉へて徒らに疑心を培はんとするものではなく、國際政治の實踐分野に於ける明白なる事實を指示して大局の推想に稗補せんとするものである。

（一）　現在殖民地として壓迫搾取の對象となつてゐる諸民族は孰れも有色人種である。黑人小說家ルネ・マランは其作、『ペツアラ』に於て、如何にアフリカ黑人が南歐白人文明國に依つて無慙に彈壓せられてゐるかを描いた。殖民地國の黑人、銅色人は現在支配國の白人と烈しく鬪つてゐるのである。唯彼はその手段に於て殆んど不利抵抗狀態に置かれてある

が爲めに、抑壓に屈してゐる丈である。故に問題は彼等に起つ上るチャンスの來るか來ないかであるが、日本の滿洲事變は之に一つの前進を促した。滿洲事變の歐米人に取つて重大なる意義を有つと云ふその一は、アジアに在る彼等の殖民地の背反にあることは、何人も認めてゐる所である。而して其内容を爲す所のものは有色人種の叛亂と之を鎭壓せんとする白色人種との死鬪である。抑壓人種を持たぬ日本人には、有色人種との無言の鬪爭を現に續けつゝある白人種の心理には容易に想到し得ないのではないか。而して吾々の見る所ではその心理は恐怖と反撥的憎惡と鬪爭の心理である。昨今の歴史再建の自然的機運、有色人種擡頭の機運は彼等白人に次第に暗鬼を生ぜしめつゝある。

（二）　獨逸再軍備宣言と伊エ紛爭の經緯から吾々は次の事を知る。即ち、英佛等の諸白人國は、出來るだけの讓歩をする。殊に伊太利に對して英國は、自領の一部を提供したとは云へ、エチオピアの重大なる犧牲に於て、妥協を求めてゐる。若しエチオピアが墺太利であり、白人國であつたら、英國と雖も、その約半ばを讓渡せよと云ふが如き無法なる妥協案を考慮することは無かつたであらう。吾々は此處に殖民地民族彈壓の常習的虐政心理の外に、白人種間の爭執は遂にその血路を有色人種の犧牲に求め來るべき傾向を看取せざるを得ないのである。

（三）　而して最後の最も決定的の事實は日本の勃興である。日本が滿洲事變とは反對の方向、即ち萎縮自滅的方向を辿つたなら、急激な武力的强壓は感じなかつたかも知れない。從つて主として經濟的に、或は外交的に、自滅日本包圍陣が加速度的に濃縮されたとしても人種戰的威迫は受けなかつたかも知れない。然るに日本の勃興は、（イ）被壓迫有色人種の反白人的動向を促し、（ロ）世界に君臨するアングロ・サクソンと次第に覇を爭はんとする形象を、次第に夜が明ける如く曠かにしつゝある。而して此の事實に力點を打つものは、太平洋を繞るアジアが勢力を開展すべき新なる角逐場である事實と、それ故に既に手の下しやうのない歐洲の天地に蹋蹐してゐる諸邦は、歐洲に於ける爭を戢めて和協し、アジアの王座を護る日本に正面を向けて來なければならない宿命とである。

以上の事例を惟ひ事變後の對日重壓を思ひ、更に彼等の胸底に流るゝ偏見を憶ふ時、吾等は人種戰の遠望に對して警報を發せざるを得ないのである。

而もかゝる動向は八紘一宇の大理想と杆格するものである。吾々は更に彼等に虛を與へないが爲めに國策を强化すべきことの必要を痛感するのである。

最後に强化必至の第三の理由として、皇道の實現を先づアジアに期し、之を彼等に對する啓蒙運動の典型と爲すの要あることである。

二　强力國策の諸問題

國策强化が綜合的國力の强化を意味するものであることは言ふを俟たない。その根本策は前章説したる所に可成的速かに隨順するの他はない。然し乍ら、之を一擧に斷行することは國際經濟の一環としての活動を持續する現狀に於ては不可測の實害を蒙らざるを得ない。隨つて、全局的利害に立つ決斷と、周匝なる用意とを以て、漸進的に且つ積極的に歩を運ばなければならない。

然らば國際重壓の容赦なく加重する今日、先づ國策强化に關する諸問題の輕重に就て一應の考察を加へる必要がある。

（一）　軍備の先充か餘力の蓄積か

現在の政治に於て、常に同題となつてゐるのが是れである。即ち軍備充實の爲めの赤字を、今後に於ても公債を以て支辨することは今日の金融機構を轟て破るものであり、その時期は餘り遠くない。仍つて之が爲めには恒久的財源を新に求めなければならない。而してそれは一に增稅に俟つ外はないが、それは精神的にも物質的にも國民の戰時餘力を涸渴せしむるものである。それは軍備を手控へ、いさ鎌倉と云ふ際に全力を發揚すべきである、となすのが餘力蓄積論である。

之には三つの前提がある。（イ）は之以上の公債支換が金融機構上不可能であるといふことであるが、今日までの所赤字公債の膨脹は、何等惡性インフレの症狀を見ず、却て昨年の如き產業の發展、特に新興重工業の飛躍に促し、未だ懸念の模樣はない。而も、それには日銀のマーケット・オペレーションが預つて力あつたといふことは、金融統制への重要な暗示である。（ロ）は開戰となつてから慌てゝ軍備をやつても間に合ふといふことであるが、軍艦は固より平生艦に習熟して居なければ彈も當らないし、砲彈使用量の如きものも十年毎に桁が三つ位づゝ上つてゐるのであるから、次の戰爭には餘程の量を貯藏して置かなければならないし、かくして平時軍需工業を盛行せしめて置いて始めていさと云ふ時に間に合ふのである。近代戰爭の資材消耗速度は生易しいものではない。（ハ）は軍需工業が全く浪費的であつて之の盛行が國民を疾弊すると爲すものであるが、海軍の如きは九割は國內消費であり、陸軍と雖も同樣、現に國內に工業景氣を作りつゝある程であるから、未だ公債の支辨能力さへある筈である。

然るに、例へば公債五十億時代には之を最大限なりとし、之を越せば金融機構が崩壞しその爲めに國家が危いと言ふ、更に五十億を越えて百億に至ると、之を越せば危いといふ。吾々はかく負擔力があり乍らない〳〵と聲明することその事が、却て不安を釀成し外國に意外なる惡影響を與へるものであると思ふものである。

況んや之を列國に比較すれば、國債は米國三百四十二億弗、英國は八十億磅、伊國は一千六十五億リラ、佛國は二千八百九十四億法であるのに對して我國は九十億圓と云ふ樣に殆んど桁違ひに少い。（獨國は二十七億ライヒス麻で少い）又國稅負擔額も、國民所得一千圓に對する負擔額を見ると、英一六八圓、米二七圓、獨一一〇圓、佛一一四圓であるのに日本は七一圓で米國を除けば遙かに少い。殊に、貯蓄說を主張してゐるのは巨大資本を代辨してゐると見られる高橋藏相一人で、健全財政を守るなら增稅を爲すべしとする意見は、內閣調査局、大藏省事務當局及び工業資本陣營からも擧つてゐる。即ち貯蓄說の影は薄いと云ふ譯である。

而して此の說の重點は實は意外な點にある。即ち、軍備を充實することは想定敵國を刺戟する、此方が控へれば先方も控へるであらう、と爲す點であるが、然し是れは、例へば軍縮會議破局の今日米國に對して殆んど望みのないことであり、第二次五ケ年計畫を遂行してゐる蘇聯に就ても同樣であり、結局却て、是等想定敵諸國に自信を與へ、攻勢の虛を與へる致命的危險を持つてゐる。

（二）　健全財政か統制强化か

健全財政論に就ては昨年末から本年初頃にかけて多くの反對批判が新聞雜誌に現はれた。仍つて此處ではその根柢の誤りを指摘するに止める。即ち、之は常態金融の維持を前提としてゐるものであり、從つて何等の非常時意識を持たないものである。繁榮の甘夢を一口でも延命しやうとするものに外ならない。換言すれば何等非常時的計畫を持たないと云ふことである。非常時計畫を樹立すれば其處に新なる健全財政が生れる筈である。その方向は即ち前章槪說の意味の統制强化である。

（三）妥協貿易の進展性

列國を刺戟せず妥協協調に依つて平和的貿易增進策を圖れば、暫らくはより以上の發展を望み得るから、此の限りに於て強力政策は多少緩和すべきである、と爲すものである。此の立場の根據は、（イ）安價良品は結局各國人民の要望であるから、政府も夫々の國民の要望に負けて日本品を輸入せざるを得ないとする見透しと、（ロ）濠洲、加奈陀等は既に協調政策が成功してゐる、故に印度の如きも此方らが輸入國であるから改善の可能性があると爲す二點である。然し乍ら、

（イ）の見透しは、列國が益々國策的保護强化を圖らんとする今日に於ては寧ろ各種の制限は增大するものと見なければならないし、（ロ）の加奈陀は寧ろ强力政策の効果であり、濠洲は我國の逆貿易の力に他ならない。故に妥協政策に依つて何程貿易發展の維持が可能であるかは大いなる疑問であると云はなければならない。

加之、貿易發展の有力な原因は、國內產業の統制强化、爲替安、工業の高度化に依る商品構成の變化及び輸出市場の構成變化等であり、第一第三は國策强化と相伴ひ、第四は之と殆ど關係なく、第二は國策の强化に依る諸現象に依つて修正されるに至るであらうが、然し貿易の自然發展に任せても、一度順の時代が來れば忽ち變化を起すべきは明白である。即ち、積極的原因たる統制强化の諸方策を進める方が寧ろ有利ではないかと思はれるのである。

三　國策强化を斷行せよ

以上强力國策の必要であること並に之が樹立の可能であることが明かとなつた。然らば、此の重且大なる使命を如何にして遂行すべきか。

吾々は第一に、國民の全體又はその主動向がその心になることが必須の前提であり、第二に、外形に非ずして內容の速かなる適順が必須の過程であると信ずる。

蓋し、國民の主動向がその心にならなければ、勢ひ施策は强行となるであらう。又外形のみを整備して一擧に之が實現を圖らんとすれば、恐らく政治、經濟其他萬般の社會的機能の一時的梗塞、尠くとも著るしい跛行狀態を現出するであらう。その場合國民多數の動向が、その心でなければ、梗塞又は跛行狀態は國民の反動を招く惧が多分にあり、國民多數の動向がその心であつても梗塞乃至跛行狀態よりの回復は早いであらうが、一時は國民發展の途上に一大難所を自ら築くことになる。

されば最善の方向は、國民の主動向が點々その心になつて、目前の局勢に迅速に適順して行くことでなければならない。換言すれば、當面の應急策の連續乃至はその集積の上に、使命の達成を望み得るのである。即ち謂ふ所の國策强化の前提である。

而して國策强化の具體的內容に至つては、それ〴〵の部門の識者が、その專門の角度から專門の智識を以て考察した結果を綜合したものでなければならない。例へば此の場合、一切の經濟活動を半ば意識的に支配してゐる巨大資本閥の覺醒はその中に在つて最も重要なる役割を果すものである。それ故吾々は、玆では、唯、吾々の感得せる方向に就て、二三の示唆を爲すに止める。

第一の最も平凡なる原則は、局部的の利益を大局の利益に振替へることである。

吾々の望む彼岸に達する前に現在約一億、而も年々百萬人を增加する我國の大人口を維持する爲めに必要なるものは、

一の勢圏を確保することである。その平時に於ける具體的生活方法は工業の擴大高度等であり、その爲めの資源と市場とである。戰時に於ては廣義の戰爭資源の保有である。現在の日本工業は各國の積極的自衛策に依つて著るしく歪められてゐるが、兎も角も平時狀態に於て、工業立國行程を歩んでゐる。さうしてそれは、濠洲、加奈陀、蘭印、米國等の資源保有國の利用、及び之等と東南アジア市場との存在に依つて、資源と市場との保持を得、辛うじて適營されてゐるのである。そこで例へば、國內水力電氣の開發に依つて動力資源を大いに節約し、我國特有の事情に基く產業並に貿易發展の原因を一層强化することは出來るが、それは同時に市場の擴大を必要とする。然るに世界の市場は既に巨大資本主義國に取つて狹溢であり、その故に、我國の一大市場であるアジアが是等の諸國の所望の地となつて居り、その故に太平洋時代が謳はれてゐるのである。即ち現に吾々は東南アジアに於て、將又北アジアに於て、市場爭奪に從事してゐるのである。而してその爲めに列强は、極端な自衛的排日貿易政策を執り、或は東アジアに凡ゆる外交工作を加へてゐる。故に今日、西歐諸國製品の三分の一とか四分の一とか云ふ馬鹿々々しい値段故に兎も角も、是等の非道なる禁制網を潛つて維持されてゐる吾が國の貿易、從つて工業の一大部分は、覺束ない平和政策に信倚して居たならば、當然、近き將來に於て破綻に直面するであらう。而してその時期は、彼等の市場擴大がアジアに成し遂げられた時である。何故ならば、それは、（イ）日本の戰時資源を滿洲と日本々土に局限し、その事に依つて我國の戰爭能力を彼等が蔑視する時であり、（ロ）彼等の市場擴大は彼等の既成市場に對する我國の進出の餘地を與へるものに非ずして却て彼等の生產設備擴張、彼等の工業勢力擴大を齎すが故である。

そこで例へば北支であるが、現在北支に對して所謂和協的工作は、南京が日本の道義的使命を納得しない限り、如何に外交責任者が信じても到底不可能である。何故ならば現に、第一章に一言した如く南京政府即ち浙江財閥の資本的北支々配の活動が着々進行してゐるからである。金融資本が著るしく浙江財閥に吸收せられた事は既に周知の事實であり、此の資本は或は農村に働きかけ、或は河北山東に一大棉花增產計畫まで樹てゝ居た。而うして浙江財閥の背後に在るものは英米の金融資本である。此の場合英國邊りの勸誘に應じて是と日本資本を合同せしめる事も可能であるかも知れないし、目前若干の利益があるかも知れない。併し假りにその結果南京政權が强大となつた曉に於ける日本は如何？　南京政權は本質的に反日である。その相談相手が飽く迄も市場の擴大を欲する英米等の歐米資本であつたとすれば、その結論は言はずして明かである。

然るに局部的利益――利潤――に拘泥する所見は、（イ）北支に勢圏を設定したとしても、資源開發、產業新設共に採算不利であり、或は內地產業に脅威を支へる不利があり、（ロ）外國の服複的な、他の市場に於ける强壓を蒙るであらうと爲し、（イ）終極に於て物（資源と市場）を保有して置くことの絕對的な强味、それが百年の大計より見た必須であること、（ロ）若干の採算不利を忍んで產業開發を爲すことが、犧牲的な對滿建設工作と同樣に、將來に亘つて支那の民情を把握し、皇道を光被するの實證を示すことの、大局的利益を度外視する。結局は取扱へず『物』を有つて置くことではないだらうか、然る上での道義であると信ずるものである。

第二の之も平凡なる原則は、分裂から統一へ、分析から綜合へ、である。

分析は自由主義の思想的弊寶の根源である。分析そのものは近代自然科學の驚嘆すべき進步を產むだ程不可測の價値を持つてゐる。然し自然科學そのものゝ究極が未だ闡明されて居ない所に一つの禍害が生れてゐる。それは分析の尖銳的に

追はれてそれの綜合的觀察が甚だしく遲れ、若くは怠つてゐる事である。

卑近な例は醫學である。西洋醫學は代表的分析醫學である。所が佛國の或る碩學は近代醫學の無限に强く通弊として、社會及び人間の病氣が無限に殖え、治療が常に一定の距離に於て新なる病氣を追掛けてゐること、さうしてその重大なる一因として一の病氣に對する治療法が他の病氣を作る原因となる傾向のあることを指摘して痛嘆し、分析醫學の結果であると論じて居り又、最近獨逸醫學が東洋醫學に着眼してその熱心な研究を開始して居る。反之、東洋醫學は綜合醫學であり、一元療法である。細かい解剖學的智識に於て到底今日の比ではなかつたが、その治病方面に於ては著るしき成果を收めてゐた。之れ蓋しその根本の考へ方が綜合、一元に在つたからであり、人間を生命一元として觀察して居たからである。洵に正しい着眼であつた。さうして之こそ皇道の原理を現實に示顯したものである。而して最近西洋醫學は治病の實際に於て、自ら反省し、分析觀の誤謬を綜合觀へ是正せんとする方向を僅かに示しつゝある。

分析觀の尖鋭化が不知不識の間に分裂觀を齎らすことは當然である。之が經濟現象に於ける利潤觀と結び附いて既記の如き大きな弊害を百出した。さうして政治と經濟と外交との分裂にまで發展した。

日本に於ては、歐洲大戰後の小康時代に於て西歐文化が空想的飛躍を遂げた。その結果、一方に分析觀が全能的支配權を獲得すると共に、他方經濟の利潤觀、政治の利潤觀の抽象化が起り、更に平和の恩惠に依つて政治と外交との分析、分裂が起つた。かくして、日本發展といふ生理的異常現象に直面して、國家生活に對する國內政治的觀察と國際政治的觀察との一元觀が著るしく缺除してゐる事となつたのである。而してそこに在る三位の一たる經濟的國際觀は分析的利潤觀のそれであつた。吾々は此の分析的思想を統合思想に還元しなければならない。東洋思想への復歸の意義である。

醫學は既に反省しかけてゐる。世界の政治に於ても此の反省が行はれてゐる。蘇聯の經濟、政治の社會化はそれであり獨逸、伊太利、米國に於ける經濟の政治化はそれである。而して之を社會化、乃至は政治化と見ることは未だ達して十に至らないものである。今までの政治と雖も或る意味に於て經濟の政治化であつたのであるからである。即ち、政治の統合觀に達すべきである。吾々が現在に於て、國防の要求と、農民の窒素狀態に依つて代表される社會的要求と、更に獨占資本が人間の意志を離れて要求する所とか、調和點を有すと信ずる所以である。蘇聯邦の二次に亘る五ヶ年計畫、換算を度外視した極東開發計畫、驀進的國防强化、統一外交工作等は吾々への一の手本であり雛形である。

第三の原則は、手段觀を目的觀へ還元することである。

手段が進み過ぎると目的を忘れることは、目的を見詰め過ぎると手段を省みないのと同一轍である。交換差の增大の爲めに自然科學の利用が行はれ、自然科學の發達が此の關係の機械化を高度にした結果は、自然科學は單に交換差の爲めにのみ存在し、最初の人類の福祉なる目的が置き忘れられ、人間が自然科學の奴隸と化した。玆でも不十分乍ら之に氣附いて自然科學の利用を目的觀へ還元してゐるのが、蘇聯の政治である。利潤を念頭に置かない自然科學の研究、經濟發展への組織的、段階的計畫、國防計畫の實施工程等の先例がある。第三章に略記した各種の社會的不合理は畢竟この誤まられたる手段觀の所產である。

以上三原則は、診る所、一物の角度を變へたものに外ならない。

そこで吾々は、以上の原則を採用することに依つて例へば、經濟的には分配と金融の統制などを想ひ浮べ、政治的には財政の應急的國家的要求の充足の可能性を、社會的には失業と過勞々働との調和、農民の修羅脫却、發明其他の科學の勝

利に對する社會的感謝等を待望することが出來るのである。

×　×　×

最後に重ねて附言しなければならないのは、かゝる動向は、單なる吾々の想像に非ずして、國際的、社會的の現實であるといふことである。

從つて、好むと好まざるとに拘らず、事態は進展する。而して速かに順應する所に、歷史自然の大道があり、逡巡する所に大いなる破綻、國内に於て炸發するか、國外に噴出するか――破壞か戰時統制經濟――から來ることを想ふものである。何故ならば、發展日本である限り、此の非常情勢は續くからであり、言ひ換へれば、此の非常時が即ち常態たるべく必至だからである。

（完）

昭和十一年三月十日　印刷・　内外危局と躍進國策の提唱
昭和十一年三月十五日　發行　（定價金拾錢）

編輯兼發行人　日本橋區江戸橋三ノ四（江戸橋ビル）　國策研究會　代表者　吉本淨

印刷者　東京市神田區神保町三ノ二九　鈴木源太

發行所　日本橋區江戸橋三ノ四（江戸橋ビル）　國策研究會　電話日本橋（24）一〇五九番

不許複製

國策研究會編